へ7
4399
1

へ7
4399
1-8
門 へ7
號 4399
卷

高蘭山先生述

和漢朗詠集國字抄

朗詠の抄書多しといへども其簡多く、僉義長ぜて釋と煩煩多く讀み難し、今諸家の說を折衷し、漸く來る從訂し、句々の字ゝ國字を點じて、其句々の義を釋せり、和哥も准じて抄出し、籠頭ハ本文と平假名ハ讀まむいろはとをんべ童も來ふ漢籍まで從雜ふべし

630

和漢朗詠集抄序

倭漢朗詠集者、四條亞槐公任卿所緝也、詩歌各二致、和漢風情一蓋本邦和歌を以二句爲一首也、故詩不拯全章、文不摭首尾、而亦二句一聯、以偶和哥、句中奇奇言分有、閑都一の朗詠者也、而公卿暨縉

故 菊地三九郎氏 大正十三年

紳若至皂隷無不貯硯匿矣此書行于世殆八百年焉其間始有江家注中有覺鴻註玄慧之抄后有永濟季吟之註雖不乏解釋而麁者難迎意密者倦意義尋常児女之情槩然也今也書肆量運堂新企梓行強需我々豈有別説乎曩古人之糟去糟就麁細之間抄義於是乎児童可謠婦女可歌此奚為識者也總閭巷之詞勿併其野云

享和第二龍集癸亥立春日

高井伴寛述

和漢朗詠品題

○第一　春　詩文九十七章　和歌四十六首

立春　早春　春興　春夜　子日付若菜

三月三日付桃　暮春　三月盡　閏三月

鶯　霞　雨　梅付紅梅　柳

花付落花　躑躅　款冬　藤

○第二　夏　詩文三十五章　和歌二十三首

更衣　首夏　夏夜　端午　納涼　晩夏

花橘　蓮　郭公　螢　蟬　扇

○第三　秋　詩文和歌　九十四章四十五首
立秋　早秋　七夕　秋興　秋晩　秋夜
八月十五夜付月　九月九日付菊　九月盡
女郎花　萩　蘭　槿　前栽
紅葉付落葉　雁付歸雁　虫　鹿　露
霧　擣衣
○第四　冬　詩文和歌　三十二章十四首
初冬　冬夜　歲暮　爐火　霜　雪
氷付春氷　霰　佛名

○第五　雜　詩文和歌　七十六章二十
風　雲　晴　曉　松　竹
草　鶴　猿　管絃付舞妓
文詞付遺文　酒
○第六　雜　詩文和歌　九十四章二十八首
山付山水　水付漁父　禁中　古京　故宮付故宅
仙家付道士隱倫　山家　田家　隣家　山寺
佛事　僧
○第七　雜　詩文和歌　六十九章十七首

閑居　眺望　餞別　行旅　庚申

帝王付法皇　親王付王孫　丞相付執政

将軍　刺史　詠史

○第八　雑　詩文和歌　八十七章　二十三首

王昭君　妓女　遊女　老人　交友

懐舊　述懐　慶賀　祝　戀　無常

白

通計　詩文　五百八十四章　和歌　二百十六首　朗詠詩文全章のうち

よう二句と採一聯として和哥の上句下句ハ擬ものを偶七言絶句四句なり出るどもこれを二章とす文も是に准ず章と別五絶ハ全く一章なり

○日本作者　和漢の作者傳の疑しきを暫くこれを欠て黒くしん他日古書の正説を得て鐫べきをまつ

醍醐天皇　六十代延喜の帝なり

村上天皇　延喜帝の皇子天暦の帝朱雀帝ハ嗣なり六十二代

惟高親王　文徳帝の皇子なり清和帝の御兄なり

前中書王　村上帝の御弟兼明親王中書ハ中務卿の唐名なり又御子左宮云

菅丞相　菅原是善の三男右大臣道真公贈大相国北野天神と崇む

後中書王　村上帝の御子二品中務卿具平親王　寛弘六年薨

清慎公　小野宮関白実頼公の謚なり貞信公の男廉義公の父

紀納言　弾正忠貞範の男中納言紀長谷雄卿字ハ紀寛　紀家と記是

江納言　大江中納言維時文章博士

後江相公　従四位下大江玉淵の男泰議朝綱　天徳元年薨

野相公　敏達帝の後創泰議岑守の男小野姓参議篁

善相公　泰議宰相三善姓清行相公と云けり泰議宰相

橘相公　泰議廣相

菅三品　右大辨高視の男式部大輔三位文時卿　天元四年逝

菅雅規　右大辨高視の男山城守菅丞相の孫にて従三品の兄

大江匡衡　泰議左大辨齊光の男匡房の曾祖父

源英明　寛平法皇の御孫齊世親王の御子　左近衛中將前藏人頭母は管家の女
源相規　肥前守　圓融帝御時の人
源爲憲　筑前守忠幹の男　寛弘八年卒
統理平　三統姓　從四位式部大輔　延長四年卒
良春道　良峯姓　延喜の時の人
菅輔昭　菅三品文時卿の男　大内記
藤篤茂　藤原繁茂の男　大内記
橘在列尊敬　延暦寺の住侶　俗名橘の在列
都在中　良香の男
江以言　大隅守大江仲宗の男　式部大輔　文章博士
菅淳茂　菅公の四男　秀才
橘直幹　尾張守秋成の孫長門守長盛の男　康保の頃の人
源順　至の孫左馬允舉の男　後撰集和名集の作者　和漢の才人
紀淑望　紀中納言長谷雄卿の男　古今真名序の作者
都良香　主計頭貞継の男　延喜の朝文章博士
橘正道　少納言匡利の男　宮内少丞　高憂ふ渡り宰相と云
慶保胤　慶滋姓　近江掾加茂忠行の男　法名寂心　圓融帝御時の人
小野美材　岑守の孫　篁の男　掃部頭　延喜の時の人

田達音　又忠臣と云　本朝文粹の作者
義孝　謙德公の男　少將　行成卿の父なり
藤惟成　左中辨惟村の男　世よ五位の摂政と号す　拾遺の作者
江澄明　[redacted]
菅庶幾　右大辨高視の男　大學助
高相如　高陛姓　出雲國司朗詠の作者　公任卿の師なり
資忠　菅原雅規の男　一条院御時の人
物部安興　圓融院御時の人
采女　美濃國十市の女　此集に菅家紀納言等の名を記すに初に畧し後に畧さず又紀納言と記し次に畧し紀と記し又初の如く記し誤に似たり
藤爲雅　周防守
藤伊周　中関白道隆公の男　大納言後筑紫左遷召返され儀同三司
紀在昌　紀長谷雄卿の孫　村上帝御時の人　本姓田口後紀氏に改む
紀齊名　大内記兼越前守
橘侯草　[redacted]
平佐幹　本康親王の孫行忠王の男　從五位下三河守
輔倡　[redacted]
清滋藤　清原姓　右少辨　圓融院御時の人

○漢作者

李斯　楚の上蔡の人秦に説て客卿となる

陸士衡　吳人名は機牙門將軍となる陸侍郎陸將軍とあるも同ド

白居易　字は樂天事に坐して江州の司馬に遷る自ら醉吟先生と号す

元稹　唐の河南の人字は微之白氏の詩友元九と云是〻

劉禹錫　唐の世の人字は夢得漢の景帝の後裔

許渾　唐の丹陽の人字は仲晦睦鄂二州の刺史

李嶠　唐の趙州の人字は巨山嘉祐が姪にて大曆十才子の一人

皇甫曾　字は孝常皇甫冉が弟侍御史監察後舒州司馬

左大冲　名は思齊国の人少きより博覧なり

公乘億　字は壽山唐の代朱才集一巻連昌宮の賦愁の賦あり

温庭筠　唐の並州の人字は飛卿書千餘言をまなび方山の尉となる

杜荀鶴　杜牧子が微子字は彦之九華山人と号す翰林學士又從一と云袁州の人唐の中臺〻郎〻

李嘉祐　唐の大原の人字は摩詰官尚書に至る詩画高名なり

王維　唐の潤州の人字は茂改十歳にて文を作官左補闕ふいる

皇甫冉　唐の汾州の人字は延清

宋子問

賈嶋　唐の范陽の人字は浪仙初は浮屠と信ず韓退之教を為む

張文成　名は鷟唐の深州の人青錢學士と称す祕書監に至卒て憲と謚す

楊衡　字は中師唐の才子傳に出る

劉元叔　名は敬和一に字は平叔高宛縣の令なり

謝觀

羅胤　唐人羅鄴羅隱とこの三羅と号し一本に胤を維に作は非

智者大師　天台山に住し摩訶止觀を筆す

和歌作者

仁德天皇　應神帝の皇子人王十七代の帝なり

章孝標　唐の桐廬の人大理評事に官す

張讀　讀は續の誤〻吳縣の人宋の明帝の時中書令国子祭酒

鄭師冉

郢展

謝偃　唐の貞觀中述聖の賦を作り時の人謝賦と称す

賀蘭遲　字は進明唐の至德中嶺南の紅畧使員外郎となる

前に云ごとく初白居易と記し次に白と畧記せば終まで白と有べきと然らざるは謂まの兄ごと

小松天皇　仁明帝の皇子五十八代孝光天皇の小松の陵に葬り奉る

村上天皇　詩の作者に出

志貴皇子　天智の御子施基の皇子と云う御子光仁即位まゝ田原天皇と謚す

明日香皇子　美和元年薨久賀姓の祖

七条后宮　宇多帝の后宮温子

一条攝政　九条右丞相師輔公の男伊尹公謙德公と謚す

清慎公　詩の作者に出

朝綱　詩の作者に出る後江相公

人丸　柿本氏持統文武の朝に仕へ石見の人哥道の仙人丸大明神正一位

仲満　安倍姓父祖不詳元正帝宝亀二年入唐　中書舍守の男と云非へ

花山院　冷泉帝の皇子六十五代の帝く世とゝゝ山に入法を修す入覚法諱

安貴王　天武帝の御孫大津皇子の御子

原見王　高市皇子五世の孫従五位上高階峯緒の父

九条左相府

後中書王　詩の作者に出

麗景殿女御　村上帝御時の女御代明親王の御女

齋宮　重明親王の御女伊勢の齋宮女御後村上帝の女御に立る

赤人　山部氏正六位上宿祢養老神亀のころの人　人丸同等の哥仙

篁　詩の作者に出る野相公へ

大納言重光　代明親王の一男

安倍廣庭　左大臣御主の男権中納言養老のころの人　晴明の先へ

兼輔　勧修寺家の祖良門の孫左中将利基の子　中納言

平兼盛　光孝帝の御末大貳篤行の男王氏なりと天暦のころ平氏となる

業平　平城の御孫阿保親王の五男行平の弟在原中将美濃権守

重之　清和帝四代へ貞元親王の御孫兼信の男　東宮帯刀

藤原經臣　大学頭佐高の男肥前守

友則　宮内少輔紀有朋の男一説に八非へ古今撰者四人の内　大内記

藤原興風　濱成の曾孫永谷の孫道成の男従五位下相摸掾

家持　大納言大伴宿祢旅人の男従三位中納言

藤原高光　九条右大臣師輔公の八男五位左少将法名如覚

忠岑　木工允忠衡の男　壬生姓今三人古今撰者四人の内光孝天皇の御孫是忠親王の二男正四位右京大夫

宗于　望行の男従五位上佐守木工頭御書所の預　武内宿祢の末

紀貫之　業平の孫棟梁の男哥道賞美より〳〵古今集巻頭三入

元方　大江音人の男正五位下伊豫権守

千里　伊勢祭主輔親の男神祇大副祭主　能宣の父へ

賴基　大蔵卿国房の男四位右大弁滋野井弁と号す

公忠

深養父　清原姓豊前房則の男　内匠大允藏人所の雑式
躬恒　凡河内姓行氏の孫諶利の男　九の字今はわちひの甲斐少目
忠見　忠岑の男　摂津国大目
良材　詩の作者に出　菫の男
清正　中納言兼輔卿の男藤原　左少弁五位　天慶二年卒
好忠　先祖詳るゝず曾祢氏丹後掾　曾丹と称す
能宣　大中臣祭主輔親の孫頼基の男　後撰集撰者五人の内
義孝少將　詩の作者に出
良峯宗貞　良峯姓安世の男左近衛少將　遁世して遍昭僧正是〻末に再び出
實方　左大臣師尹卿の孫大納言濟時卿の男　陸奥守
正澄　近院右大臣飛有公の男
坂上是則　父祖詳るゝず大内記延喜のころの儒官
惟正　中納言兼輔卿の男　従五位下刑部卿
敏行　按察使富士丸の男右兵衛督　四位少將
元輔　清原深養父の孫下野守顕忠の男　肥後守後撰集撰者の内
道信中將　大政大臣藤為家恒憲公の四男　従四位上左中將
橘直幹　詩の作者に出
平貞文　好風の男

源順　詩の作者に出
高向草春　作者部類に官位等詳るゝず
伊勢　伊勢守藤原継蔭の女　七条の后の宮女
中務　式部卿敦實親王の御女
齋宮内侍　伊勢の齋宮の女御に仕る内侍〻　誰がもよるゝや知べくば
白女　源造が女江口の遊女
海人　江口川尻なゞの遊女のぐひそ　水辺に住のをいるゝん
達磨大師　南天竺香至王の子梁魏に入西〻る　唐代宗圓覚大師と贈
空也上人　仁明帝の御孫常康親王の御子　六波羅密寺に居す天禄三寂そ
為頼　中納言兼輔の孫刑部少輔雅正の男　皇后宮大進　拾遺の作者
元真　甲斐守藤原清雅の男丹後介　後拾遺の作者
信明　南都興福寺の僧拾遺の作者　元亨釈書に出
仲算　詳るゝず人丸の書あやまり
繩丸　誰をさして云ゝるゝや　つまびらかならず
丹後國人
王仁　漢の高祖八代の孫百濟国より　来て難波津宮に〻つく
傳教大師　東漢の景帝の餘裔三津氏　百枝の男名い最澄　台宗の祖
惠慶法師　播州の産寛和のころの人　父祖つまびらかならず

遍昭　俗名良岑宗貞也（良僧正ゝも出ゝ慈覚の弟子寛平二叙す）

蟬丸　逢坂山の関門延喜の御子と云説非ゝ和州三輪の山ゝ隠遁の僧弘仁五年集師ゝ任ぜらるゝと辞ぜり

素性法師　遍昭俗名の時の子俗名左近将監良岑玄利

玄賓

満誓法師　筑紫観音寺の別當俗名笠朝臣麻呂従四位上

安法法師　内匠頭の適子拾遺の作者

○所緝詠賦

詩　詩序　和歌序　書序　表　讃　願　史文　策序

書　本書文　文選文　漢書文　後漢書文　文集文

止観文　遊仙窟文　和歌　自萬葉集至後撰集代々之集及家々之集

本朝の詩文ハ菅家文草本朝文粋等ようの類ようハ採来り又び和漢諸家の集と拾へりもとゝ題あれども此集ハ全章をもてとゝず畧セり題なくして句の解ざるべきハ間題のゝ所と記す和哥ハ万葉ようの後撰のゝ所ふ至ると取此集の作者公任卿後の撰集の名目とまるべハ後ゝ家集ようゝまもゝ

京都帝国大学図書之印

和漢朗詠集

捨假字附讀ゝ

仮字と加てよほむ助字ハ□を印とを讀ざるゝ一字を再反讀ハ○を印ゝ詩多くハ訓ようゝ来る今改るわり世本の點ゝ差を怪べゝず

和漢朗詠集抄卷之一

東武・高井伴寛思明著

和ハ日本ゝ　神武天皇大和国ゝ於て王業を成ゝ故やまと又ハ和を以て日本の惣称とす　殊庭ゝ倭と以て名づゝ　漢ハ震旦ゝ劉氏天下ゝ王ゝて国と漢と号も元来水の吾邦ようゝ彼国の古今ゝ通ド呼で漢或ハ唐と云其治の盛なるゝ取りの　朗ハ清明透徹ゝ不滞ようゝ詠ハ詩歌の詠吟ゝ以上をゝ本朝唐土詩哥の秀逸と云人が如ゝ和国ハ思と歌ゝ述漢土ハ詩と以て志と云詩哥ゝ秀吟わまゝ人皆是を誦をゝ又朗詠と

ハ　和哥ハ素盞烏命出雲国ゝて初て三十一文字を詠ようひ詩ハ尚書ふ五子之歌ようり毛詩ハ周の列国の古詩ゝ漢の李陵字ハ少卿初て五言の詩を作りり日本ゝていもゝ以来世々博才出て秀歌佳作文庫ゝ満そんゞ中の朗詠詠吟をべきうのを集て此書成まゝり　四條大納言公任卿と云ハ三條關白頼忠公廉義公の嫡子ゝて頗博雅の名ようり御堂關白の二男大三條關白教通公いまゞ大將ゝてもゝる時婿ゝ取まるゝ硯の筥ゝ入まんゝて彼公任卿の撰まるゝ　一條帝の御時ゝ當まゝ寛政の今迄八百年ゝ及べゝ

春

立春

吹を逐潛て開く。芳菲之候を待不。春を迎ふ不變ず。將に雨露之恩を希ふ

將

池の凍の東頭の風度て解。窓の梅の北面の雪封て寒

春

立春

逐吹潛開不待芳菲之候迎春乍變

紀淑望

將希雨露之恩

まく〳〵立春の氣て吹を逐て潛て梅花綻ひて桃櫻芳菲の候をも待ず冬枯の樹々も春を迎まゝ〳〵変て色付雨露の恩を希て開ん

延喜の帝の勅して梅花を〳〵此賦を献る賤き身の〳〵る命を蒙らい冬樹の春にあひ寒木花初て綻ぶる如くなるを君の恵を待て雨露の恩を希ぶ〳〵意を述るされば此句をてやゞて四位の加階ぜ〳〵とぞ

凡註釈假字敷うて直に字義を覺延多くれば果て此字を斯訓と思べ〳〵ず

池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒

春の氣い東方より成ゆゑ同じ池の凍るゝども東の頭にまづ温か風が度て解そむる春い来まゝども北いまゞ冬の寒て寒〳〵雪封て梅も咲ぬ

萬茂

柳氣力無て條先動。池に浪の文有て氷盡開

今日知不誰計會せ。春風春水一時に來

夜殘更に向て寒磬盡。春香火に生て曉爐燃

古今

年ゆくかたちふるまひけり　とせとをいとなみとしやいとなん　定家

朗詠の撰者公任卿い紀貫之を宗とせ〳〵ふぞ古今集のごゝ年のうちの立春を巻の頭におゝれそう

柳無氣力條先動池有浪文氷盡開

白居易

池の邊の柳もやゝ芽を含枝に力もあきが春立そむる風に動き氷居〳〵池水も開て浪の文が見ゆる次の句に通て一章を

今日不知誰計會春風春水一時來

上に通て一首の絶句〳〵今日立春〳〵春風柳を動〳〵春水池に浪〳〵誰人か計會てか〳〵一時に春と来らしもゆ知ぬと昨に変る景色とり〳〵

夜向殘更寒磬盡春生香火曉爐燃

年籠ふ江刃石山寺ふ詣て作まる〳〵除夜も殘更ふ向〳〵ゝ佛前の磬の寒き音も盡曉の焼香もる香爐の火が燃て温るふ今や春生と思

良峯春道

古今

神ひもとけばむかしの人のおもかげにあるを思ふ風やくらん　貫之

早春

氷田地ゝ消て蘆錐短春枝條ゝ入て柳眼低

先和風として消息を報ぜ遣。續て啼鳥として來由を說教

東岸西岸之柳。遲速不同。南枝北枝之梅。開落已異

紫塵の嬾蕨人手を拳。碧玉の寒蘆錐囊を脫

氣霽てハ風新柳の髮を梳。氷消てハ浪舊苔の鬚を洗

庭ゝ氣色と增バ晴砂綠なる林ゝ容輝と變ぜれば宿雪紅

夏のちゐ袂も浸手るも掬ゝ水の冬氷ゐると春ゝ風ゝ吹解さゆゑひちてらひてゝもぐい手ゐすゝ

拾遺

春ゝとゝ

さの〳〵ゝる春景色山も多ゝふ芳野山をゝるゐ春と用ゐる儀とゝ

志參

早春

氷消田地蘆錐短春入枝條柳眼低

元稹

氷消て田地ゝ蘆の芽の出ゝ錐の短く物ゝ出ゝ

ゞく春の氣ゞ柳の枝條ゝ入て芽と吹ゝ眼のゞくゐも枝垂ゝ低と作り

先遣和風報消息續教啼鳥說來由

白居易

春の來を客ゝ喻ゝ和ゐる風の吹來い先ハ消息とおゝ泰らんと報越ゝ似ゝゝて啼鳥の囀い客ゞ來て來由と說話ゝゝにゐる

東岸西岸之柳遲速不同南枝北枝之梅開落已異

慶保胤

彼所ゝ此處と地と逐て春の生來ゝを作已文なり春の氣東方ゝ生ゝ東の岸ゐる柳い速くゞゞ西ハ遲南ハ暖ゐる梅の南の枝ゝ開ゝ落北ハ寒く遲〳〵

紫塵嬾蕨人拳手碧玉寒蘆錐脫囊

野相公

多く崩出ゝ早蕨の色紫の塵の如〳〵ゝゆるまゞ嬾く曲り〳〵ゝい人の手を拳ゝ春まゞ寒ゝ蘆の芽ゞ尖生て青々と碧の玉の如〳〵水中ゝ〳〵出ゝい錐の囊と脫て尖出ゝ似〳〵

○史記ゝ賢士の世ゝ處ゝい錐の囊中ゝ在如〳〵とゐり

氣霽風梳新柳髮氷消浪洗舊苔鬚

都良香

天氣霽て春風の新柳とゝび子ハ髮を梳ゝ似ゝ氷消て岸打浪舊年ゝの苔ゝそゝぐい鬚を洗ごと此下の句羅城門の鬼ゞ付ゝと妄說ゐり

庭增氣色晴砂綠林變容輝宿雪紅

紀納言長谷雄

庭ゝ春の氣色と增せゞ晴砂ゝ草ゞ芽ゞ綠くゝゐる林の樹々ゝ花咲容輝冬ゝ景色ゝ引變まゞ宿雪も紅の色と帶と上ゝ草下ゝ樹と云

春興

万葉 岩そゝぐたるひのうへのさ蕨のもえ出る春に成にける哉　志貴皇子

石の上にかゝりたるが氷るを垂氷と云うへハたるひとハ谷水のそゝぎて冬氷居るその上より早蕨萌いづる春にも成たりとなん

古今 山風にとくる氷のひまごとにうち出る波や春の初花　正澄

山中にて春の風に氷の解て流る氷の岩をかゝりて散を波の花と云まで早春にて樹々の花も咲ねハ是を春の初花なりといへるの心　古今に谷風にとあり東風へ

續後撰 さゞ波や比良の高根に霞なり若菜つむべき野辺は成けり　兼盛

埜邊より比良近江の山かけて早春の景色を打眺ば高根の雪も消て埜辺の若菜つみて遊べき長閑なるさまをよそへり

みわたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける　素性

此哥下の眺望の処に出早春の哥なれど写し誤てこゝに入るなるべしよろしく釈す

春興

花の下に歸ことを忘るゝは美景に因。樽の前に酔を勧るは是春の風

野草芳菲たる紅錦の地。遊絲繚亂たる碧羅の天

歌酒は家家花は處處。空上陽の春を管領することを莫

山桃復野桃。日紅錦之幅を曝。門柳復岸

花下忘歸因美景樽前勸醉是春風　白

花の下に遊べバ景色の美きに家に帰んことも忘て眺めくらし樽を前て酒を翫べバ春の風徐に吹いよく盃をかさね酔を勧

作者白とあるハ白居易なり

野草芳菲紅錦地遊絲繚亂碧羅天　劉禹錫

春の野の草芳菲たるハ地に紅錦をのべ敷るごとし春の麗なる天ハ碧乃羅を張るごとくに遊糸繚乱てうかる春の虚に有がごとく無がごとく糸をうけたるやうのものをさして遊糸と云野馬とも云哥によんでゆうとよめり

歌酒家家花處處莫空管領上陽春　白

令狐尚書が東都へ越を送の詩ぞ春ハ哥うたひ酒を翫ぶこと家家にあり花も處處に咲なれども行先其地にあらざらバ花を賞し詩をも作て我が一已に管領春と思て押領に空く過し風雅をあやまつこと莫とぞ春夏を陽とす上陽ハ春のことゝきの陽と云ことぞ秋と冬ハ陰とす

**山桃復野桃日曝紅錦之幅門柳復

柳風麹塵之絲を統ぶ

野に著ては展敷り紅錦繍　天に當ては遊織す碧羅綾

林中の花錦は時に開落す。天外の遊絲も或は有無

笙歌の夜の月家家の思　詩酒の春の風處處の情

岸柳風統麹塵之絲　紀齊名

山にも野にも桃が咲て日にうつろひ紅錦の幅のを曝すごとく門にも岸にも柳の芽を吹るが風になびき黄なる絲を統るやうにみゆるぞ麹の塵は黄なるゆゑ黄なるてふ此字はうつくし統ぶがぬ共訓ぞ處を逐て花皆好と云を作る詩の序なりよつて山野門岸などの字を用ゆり

著野展敷紅錦繍當天遊織碧羅綾　野相公

野には諸の草花咲交りて紅錦の繍せしを以て展敷るごとく天には遊糸をとりて碧の羅綾を織成るごとし○前の野草芳菲と云は唐にて笙の此句と襲と

林中花錦時開落天外遊絲或有無　田達音

林の中に錦を咲せし花も時を逐て開もあれば散もあり天外に遊ぶ糸は或は有あるひは無さだまらず遊糸前に釈ス

笙歌夜月家家思詩酒春風處處情　菅三品

月清き夜笙をぬき哥舞して家々に遊ぶ人の思をおしはかり徐に吹春の風に詩を作酒を翫び處々に興ずる情を思やれば楽悦のもの多しと悦者衆の題を作り

春夜

燭を背て共に憐む深夜の月、花を踏で同じく惜む少年の春

新古今　ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮しつ　赤人

正二月は節會公事に朝廷いとまなく四月も神事あり三月花のころは閑暇もあれば花の下にて桜を簪してこの日も花とあそびくらすとなり

百敷とは内裏之百官の座を敷儀と云は非なるとぞ大宮人は殿上人といふなるべし

拾遺　春は猶我にて知りぬ花ざかり心のどけき人はあらじな　忠岑

花盛の頃はいづくの山おくいづくの野の末までもとあくがれ心ものどかならず我が此心を推してはかりおもへば誰々も斯あらん長閑なる花の春心のどかならぬが興へ

春夜

背燭共憐深夜月踏花同惜少年春　白

春の夜盧囲周諒と云人と同居して作るゆゑ共にとあり同とある燭がしやまるゆゑ炎を壁の方へ向火に背て夜深るまで月をながめ共に憐がる庭に散る花を踏ては春の暮るを同じく心に惜む少年はいづれも若輩とみゆることなるべし

子日
付若菜

松樹に倚て以腰を摩べ。風霜之犯難と習。菜羹と和而口に啜る。氣味之克調人と期

松根に倚而腰を摩べ。千年之翠手に満。梅花を折而頭に挿べ。二月之雪衣に落

古今 春の夜の雲間あやなく梅の花色こそ見えねかくるる 紀恒

咲くる花の色いかゝもとゝもあるゝ梅が薫とくゝ得んもゝゝべ

春の闇いろひもなゝゝとゝもあるゝ無詮無益なゝ云心

子日

付若菜

用ゐる又歳首に祝して松が枝を手折男は七本女は二七十四本

又七日若菜と羹にして食べ病を除く十節記初學記等に見えり

正月子日岳に登て遠く四方を望て陰陽の静氣と得て煩を除く通じて正月七日と

倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期氣味之克調

菅 作者菅菅丞相

寛平八年 宇多天皇雲林院へ子日行幸の序へ松に貞樹して風や霜も犯されず常盤の色と見す是に腰を摩て貞に習へ正月七日若菜の羹と調和而啜る人の氣味と調へ克て病を除くゝと期る。

倚松根而摩腰千年之翠満手折梅

若菜

花而挿頭二月之雪落衣

在列尊敬

松が根に倚て腰を摩枝を折ひい曳持べ千年祝祠の翠手のうちにあり

子の日に遊のまゝ梅が枝を折て頭にさゝ挿べ花の散るゝ二月の雪衣袖に落るゝ

新古今 子の日して若めつる野辺の姫小松ひきてやよろの陰をまさはし 清正

子の日に遊びに此野に我ゝ領ゝるゝ小松の生るゝ曳もひきのそのまゝにして千年の陰をもちゝと紀伊守そ任国の時子の日てゝ

拾遺 子の日する野辺に小松のあるゝ世ゝ代の色ふかくとひらまし 太琴

野辺に小松わるゝ人ゝ壽の長ゝと松の千とぶあやゝんとひくものとよゝ松と賞ゝ

拾遺 子の日せまゝかぎれる松もふるゝ世ふるまて万代や色へん 能宣

入道式部卿親王子の日ゝ處ゝてゝある面ゝ松を千ゝと限るゝ

今君の御齢ゝのゝず万年のゝべれば夫ゝひまゝ松も万代をゝんゝ

野中ふ菜を芼ぐ。世事之を蕙心に推。爐下に羹を和して。俗人之を美指に属す

野中芼菜世事推之蕙心爐下和羹

菅

野に出て若菜を芼つゝ羹ふる世事は蕙心に推ゝ蕙心は文選の字にて美女のごとくなる女のごとぞ爐下いとをりと和するは烹調する俗人はの

つねの人美指は美のごゝ柔なる女の指ゝ詩に手は柔美の如とあるゝ指をさし入て味を嘗試るは婦に属る

拾遺

草木を肥ゝ生ゝめんとて春の野を焼くや野辺の程なく触るる菜生いそめんとの心にて明日のこゝろゝ片岡朝之原ゝ大和の名所なり

新古今

ひ[illegible]ふきのとうを吉ふつゝ赤人

志ゝ野は前にも出るごゝ[illegible]ト領ゝ意

ゝ毎日つまんと思ふ雪にとぢられるあり

新古今

ゆ[illegible]ぬ人も思へと春野ふくる芼菜ありけり　貴之

三月三日　付桃

春來て遍是桃花の水。辨不仙源何の處に尋ん

春之暮月。月之三朝。天も花に醉り桃李盛なれば也。我野に出て若菜つゝ遊びゝ興の浅ゝねを家に在てみぬ人もちゝひ忍ぶとのゝゝに篭につゝてゝもるゝ篭にゝゝのゝゝあり

三月三日　付桃

を浮かべゝ是曲水の宴は起ゝ古ゝ上の巳日と用ゐ魏より三日と用る

昔周公旦洛邑とゝて都城と築かゝ時流水をゝて觴

春來遍是桃花水。不辨仙源何處尋

王維

桃花源と云仙境と題せゝ春來て三月の頃は何まの處にも桃花の水ひゝり何と證にて仙源と尋んゝ漢の世に武陵の漁人舟にゝ江と上る水にゝに桃の花咲乱て人の通ひゝ跡あり舟を繋て尋行に家もゝ男女住るのあり故と問ゝ秦の乱を避てかゝるゝと八十餘年食せぎるゝ十三年にゝ桃源の隱士と名付くり委くは桃源記に

春之暮月。月之三朝。天醉于花。桃李盛也。我后一日之澤。萬機之餘。曲水

后一日之澤萬機之餘曲水遙々雖遺塵絶さりと雖巴の字を書而地勢と知魏文と思て以風流蓋志之所謹上小序を上

雖遙遺塵雖絶書巴字而知地勢思魏文以翫風流蓋志之所之謹上小序

菅

春の暮月い三月之月の三ッの朝い三日へ此時節咲つゝ花が映じて天も紅に霞と見ゆる桃や李の盛りまゝ也書に天子一日万機と有てよろづのことゝ臨の其餘を以て我后今日宴と臣下にの〳〵恩沢するぞ后の恵のことゝ水と以ていけると沢すゝぐと儀にて沢と云曲水周ゝ始まる遙と云後代ゆ古の跡と追と遺塵と云此宴久〳〵行まざるゆへ絶ゝと云江州に三の山峡あり て三回せる水わゝと曲水ゝと形にようて巴郡と号て巴の字と古文に書へ

◎かゝのゝゝゆゑ曲水の地の形勢知らる魏の文帝姓ハ曹名ハ丕字ハ子桓曹操の子ゝ文帝の時曲水の飲あり巳の日と用ひず三日と用ゝ今其先蹤と思て風流と翫べ周の世遙ゝとつゝゝと遺風絶ゝとつゝゝる昔と目前に見ゝゝ志の之所に任せ謹で小序と上ゝゝ詩の序ゝ毛詩の序に詩者志之所之とあり蓋い物と推ていゝゝつゝ詞なり

煙霞遠近應同戸桃李淺深似勸盃

菅雅規

前の序と同時の詩ゝ酒と飲に上中下戸あり煙霞る春の景色遠き空も近き虚もいゝ〳〵花に醉るゝゝ同じかゝの戸にある桃李の紅の色淺きも深きもとゝ〳〵酒盃を勸て天と醉ちゆゝ似ゝ

礙石遲來心竊待牽流遡過手先遮

羽觴流と回る曲水の宴と作るゝ鸚鵡の盃と羽觴と云流繁る水岸に文士並居て水上ゝゝ觴と流ゝ我前と過ぬ前に詩と依り盃と掬て飲貴賤と論ず文才と重ずゝ盃が石に礙られ流来るゝ遲れば詩篇巧なるい心竊ゝ〳〵来まゝ〳〵と待流に牽立らまて遡に前と過に詩手と以て盃と遮りゝゝぶむ

水成巴字初三日源起周年後幾霜

菅篤茂

三月初の三日曲水巴字と成の酒宴その源周の世の古き年周公且洛邑に て觴と浮ゝ起て後今まで幾ゝ〳〵星霜と経ゝゝ巴字い前に釈

煙霞の遠近い同戸なる應桃李の淺深い勸盃に似ゝり

石に礙て遲來ゝゝ心竊に待。流に牽て遡過ゝゝ手先遮

水巴字を成初三日。源周年ゝゝ起後幾ゝ〳〵霜ぞ

桃

夜雨偷濕曾波之眼新嬌曉風緩吹不言之脣先咲

桃

仲春くゝもて花咲三月その色さんゝ

夜雨偷濕曾波之眼新嬌曉風緩吹

紀納言

不言之脣先咲

桃始て咲と云詩の序ゝ夜の雨濕ざれ花の偷ふいろゝるい美人の眼の媚ゝふ似ゝ曾波ハ美女の眼ざのゝ細なる皺ありて曾ゝる波ゝ似ると云今咲る意と新ゝ嬌と書ゝ曉ざ兩も止春の風緩ゝ吹て不言の蒼咲ゝる不言とゝけて脣とつゝひ眼の字ゝ對せゝ史記ゝ桃李言ざれゝも下もづゝ蹊と成と

桃のあくよりもあざやかなるさ　紫姬

捨遺

西王母が園の桃三千年ゝ花さき實と云故事ゝ漢の武帝桃の實と好りゝよゝる實のなりと愁ゝ時ゝ一足の青さ鳥武帝の前ゝ飛来東方朔ハゝ王母きゝる なりと屏風の後ゝかくやゝて王母花と實の一時ゝむもゝぐゝ桃と携来りゝゝてまゝる味甚美ゝ帝植ゝくゝ王母云下土の物ふあゝず上界の果ゝ三千年ふ一ゝび實なる此屏風のゝゝろゝ在童ハ三ゝび盜食るのゝとゝゝり

暮春

水と拂柳花ハ千萬點樓を隔る鶯舌ハ兩三聲

翅を低る沙鷗ハ潮の落曉絲を亂る野馬ハ草の深春

人更ゝ少時無須惜年常ゝ春からず酒を空すること莫

劉白若今日の好か

暮春

拂水柳花千萬點隔樓鶯舌兩三聲

元稹

元魏志と云人の襄歸樓を過て作る三月の比柳の枝ゝぐゝ垂て水面と拂ゝ其絮が飛で千万點浮ぶ柳花ハ絮ゝ樓を隔て聞鶯舌も春深兩三聲ゝ

低翅沙鷗潮落曉亂絲野馬草深春

菅

菅公仁和年中讃岐守ゝて任国ゝ下り松山の旅亭ゝて作ゝ曉潮の落比鷗が翅を低て沙ゝ下遊居る春の空ゝ遊糸亂ゝる比草長ゝて深ゝ遊糸前ゝ釈を又莊子ゝ其急なること野馬の走るふ似ゝることある少ゝ野馬も云或ハ陽焔ゝ云野馬もゝと云ゝあゝゝゝど字の縁ゝて草深春の字面白ゝ

人無更少時須惜年不常春酒莫空

小野篁

老て更ゝゝりて少ゝさ時ゝあゝことを月日の過行と惜むべさゝ春ゝ三月ゝて年中常ハ春ハあゝゝゝんべ春の景色と愛ゝ酒と酣ゝ空くゝゝゝゝ

劉白若知今日好應言此處不言何

ると知らば。此處に
なんぞ言應何と言不

三月盡

春と留まるも春
駐不。春歸て人
寂寞たり。風と厭
ぶも風定不。風起
て花蕭索たり

竹院君閑て

深春好と云題を作りし劉禹錫と白居易と何處か春深好と源順
云句と首に有る五言二十首の詩と作唱和集に有る此二人若今日深春の
詩席好なると知らば此處をこそ春深て好と言ひ
何まの処かに云ひひとへに此席を好といへんと

古今
いかにして過る月日にあらけまで家にて書をもぞすくしける　奥風

家の集に此哥あり古今に月日いかりて過行月日は何ともおぼえず花見る春はまこの繁うふ覺と

三月盡

留春春不駐春歸人寂寞厭風風不
定風起花蕭索

白

春駐まらず暮帰て出て遊ぶ人もなく寂寞なり風起て花の梢を
あらし景色もうせて蕭索たり此詩は古詩の調に落花を作りしぞ

竹院君閑銷永日花亭我醉送殘春

永日を銷し。花亭
に我醉て殘春を送

惆悵春歸て留まる
ぶも得不と紫藤花
の下に漸黃昏たり

春と送る舟車と動
くと用不。唯殘鶯と
落花與に別。若韶
光を使我意を知
使ば。今宵の旅宿は
詩の家に在

春と留る關城の固

皇甫氏竹を愛せり此人白氏の亭に客に来り詩を贈る其返酬の白
作なり君は行と植る院に永き日を銷し閑に暮さる我は花の咲る亭
に酒に醉ぬ殘春
とあはれなりけり

惆悵春歸留不得紫藤花下漸黃昏

春の帰去と留ても得ぶを惆悵藤の暮の春より夏に至る花に白
外に花もなれば紫の色と愛しなぶめ漸黃昏にちかぶ

送春不用動舟車唯別殘鶯與落花

人と送るは舟や車とも用る春を送はあらじ殘鶯老て谷に入菅丞相
花落て青葉とおるが春の別もぶや車は車馬車乘ってのくるのなり次も同詩に

若使韶光知我意今宵旅宿在詩家

前に通ず絶句一章に韶光は春の名なるはいきひろく若韶光が此方をおもむ
意と知るは今宵一夜は此詩の家に旅宿ありのをと此詩春を送と題なり

留春不用關城固花落隨風鳥入雲

と用不。花落て風に隨鳥雲に入

曹操い関羽と留んとて五関を固めしめ秦皇い胡人を留めんと長城を築くをぞ〳〵人を留るあい関や城の固く防ぐも春い中々留めがたし　尊敬

花い風に隨て落鳥い雲に入〳〵跡もとめぬ帰去あり

古今

ふるさと春をこゝろぬはぐ花もたつことをたをれの陰ら　躬恒

上の句と下の句の間に〳〵ことぐを入まぐ早く聞ゆ今日限りて春の終と思ぬ時も花と慕心いつとかまで今日のまと思ふ花の陰い殊に立去をく思いれぬ

拾遺

ふるもみぢちりぬる富ゆく末ふる里と花咲ぬべくなれ　貫之

花も散春の去さる跡いさびしくて人の住捨荒る古郷の如くなる意して行春のるさとあり成ぬべらとへなりぬべきと云ちりる雪の世

後撰

又もあん時ぞとゝへどたのまれぬ家多ゆあまびをしをれまぐ　貫之

今日暮る春い又来年も来るべれど存命ちうぐ〳〵なのまれぬ世なれば人〳〵れ春のゝるゝぐをゝ貫之三月三十日に此哥をよみ同年卒ぢり

閏三月

閏と置と堯典に出されい古きと周天の三百六十五日二十五刻と一歳と二十四氣ぞ分て十五日に

閏三月

今年の閏い春三月ぞ在。剰金陵一月の花を見

谿ぞ歸歌鶯い。更ぞ孤雲之路ぞ於逗留し。林と辭る舞蝶い。還て一月

十一刻余と一氣〳〵内十五日去て殘と氣盈ぞ又月い一年の日數大小と積合せ三百五十四日三十七刻〳〵一ヶ月二十九日五十三刻余うて月朔とする一ヶ月の定數三十日ぞ足ざること四十六刻余と朔虛と子ノ氣の盈と朔の虛と一ヶ年の過不及分合て十日八十八刻と一年の閏余と子ノ三年積て閏と置尚余分殘るゆゑ五年ぞ再閏と置十九年に七閏あつて過不足ぞ閏とちざれい四時齊らざるゆゑ和漢これを用ることゝてふ云い閏ぐ三月に當まつゝ又閏の字周禮に閏〳〵漢書に閏〳〵皆說あり

今年閏在春三月剰見金陵一月花

李中丞ぐ軍に行と送る詩〳〵軍務ぞ在ぐ〳〵閏て春ぐ一月陸侍郎多く剰金陵い花の多き地ぐ其名花を一月多〳〵る金陵ぞ建康府ぞあり

歸谿歌鶯更逗留於孤雲之路辭林

舞蝶還翩翻於一月之花

源順

鶯い春の初谿ぞ〳〵出て歌ひ春暮て谿に入る春なと聞ぐ更雲路に逗留ぐらゆゑ〳〵花に舞蝶も春盡ぐゆゑ林と辭〳〵去ぐ今一

之花に於翩翩と

花の根に歸てを悔まどる悔に益無鳥い谷ふ入んことを期もまでも定て期を延らん

鶯

雞既に鳴て忠臣旦を待。鶯未出遺賢谷に在

月春あらそ還て二月花の上に翩翩と谷の字儀いうとうぶ〜差ぶもこうに用な〜○これ今年又春あると云題を作る詩の序に

花悔歸根無益悔鳥期入谷定延期

清原滋藤

春ゑぬと花散て根に帰り猶閑の春ひとと悔まどる益の鳥い谷に入んと期ふる閏月あると聞て定その期と延るうん

櫻もとかくつまだもくのそあるまをいとる

伊勢

櫻の花の賞せらる春一月閏加る年ともあらんいせぬと古今ゑあるぬいはぬとある夫ぬるぬと無春ぬるもあんいあぬと櫻に云うう

鶯

雞既鳴忠臣待旦鶯未出遺賢在谷

賈島

鳳と王ふる賦へ鳳凰ハ羽虫三百六十の中の王すんい性仁うて帝王ふ餘鳥ハ臣民うて雞の旦を告ふ鳳の忠臣鶯の未谷を出ざる遺賢かうん居て鳳の朝に出ざるふ晋の趙盾灵公に忠諫を灵公怒て力士鉏倪に命じて刺さむ倪趙氏の家に忍入て同ふ盾衣冠を粧ひ

朝ぜんと早〜官服のまゝ坐して仮寐ゐ〜旦を待その威儀を見て是を殺ゐ忠臣を失ゑ止び君ふ信ゐ〜と槐木に頭を觸て死せり史記に〜ゐ忠臣旦を待の故事〜賢人いまゞ牽用らるゝ遺さん又ハ殷に太公望磻溪に周に伯夷叔齊首陽に入秦に四皓商山にこもり漢に嚴亮孤亭山にのぐ〜ひ政の正〜らざると怒てゐる〜遺賢といふ聖人上に在〜〜ハ下ふ遺賢あ〜とな〜

誰家碧樹鶯鳴而羅幕猶垂幾處花

謝觀

誰ゞ家そも碧の樹に鶯鳴て羅の幕まゞ曉も綾らゞ猶垂てあり幾ゑ處ゐゐ花やゐる堂に明ゞ夢覚る比珠の簾も未巻あげずひ

堂夢覺而珠簾未巻

誰か家の碧樹鶯鳴而羅幕猶垂幾〜處の花堂に。夢覺而珠簾未巻未

咽霧山鶯啼尚少穿砂蘆笋葉纔分

春のそゞめ山ゐ来鳴鶯い未幼く聲少に朝霧の内に幽ゐと咽ゑ云ゞ砂と穿出る蘆の芽笋に似ゐる纔に葉とゐひ〜〜早春のさゑ

元稹

臺頭有酒鶯呼客水面無塵風洗池

霧に咽山鶯い啼と尚少ゐ。砂と穿蘆笋い葉纔に分り臺頭に酒有て鶯

客を呼水面に塵無しと風池を洗

鶯聲に誘引せらるまて花下に來。草色に拘留せられて水邊に坐す

同類と相求むる於感じて。離鴻去雁之春の囀に應ず。異氣と會而終に混じ。龍吟魚躍之曉の啼に伴

思賢と云人の別莊と云さう其堂に酒が用意して有鶯が酒と勸んと轉に客と呼庭の泉水に塵う清さに風が池と先ん

白

鶯聲誘引來花下草色拘留坐水邊

鶯の聲に誘引る花の下にうゑん出若草の青さめでゝ拘留らる水とすゞめつ芝にふ坐やすゝ此詩い春の江が題じゃ

白

感同類於相求離鴻去雁之應春囀

會異氣而終混龍吟魚躍之伴曉啼

大内に諸臣と召し宴とのひ題とのう詩哥を賦すを内宴と云是も鶯の囀が管絃に韻と題にのう詩を作らう亭文に鶯と類と同ふもるそのて求まじ春鴻や雁が北の胡国へ離る去時が鶯の囀比に應ずまて琴に離鴻去雁の曲春鶯囀の曲あるもあゝ云り又類を異ふるのうて管絃に混ゝきと尋れ會てい龍吟魚躍の壱有て鶯の曉の啼に相伴ふ漢の馬融宇い季長曉堤を行くふ龍水中ゐ啼と壱して天に上る声高くすゝ哀に竹と鑵て吹其声と摸す笛是に始る龍吟これ殷の湯王洛水に壁と沉て魚に躍び躍其声哀ゝうして魚躍の曲と云

菅三品

燕姫之袖暫收。繚亂にうと舊拍に於猜周郎之簪頻に動て閑關にうと新花に於顧

新路に如今宿雪を穿。舊巣に後の爲に春雲に屬ん

西樓に月落て花閑の曲。中殿に燈殘て竹裏の音

燕姫之袖暫收猜繚亂於舊拍周郎之簪頻動顧閑關於新花

同上

前と同ト序文に漢の昭帝の后に趙飛燕と云い躰軽さこと燕の飛ゝ舞の上手に鶯の音と管絃と思て奏ゝ拍子が繚乱とのやらぬるぞ拍が舊く朽ゝかゝあると猜て暫く舞を止る意と袖收と云ぞ拍い樂器に云びさゝいと訓ず呉の周瑜字い公瑾能舞り鶯の囀が樂に韻和て一ゝ面白く新ある花に閑関ゝと顧ゝ閑関い詩に睨睨とあるに同ド囀ゝ郎いちのこ姫いとゝこゝ簪が動とゝ

菅丞相

新路如今穿宿雪舊巣爲後屬春雲

鶯が初春谷より出る新る路い宿の雪を穿てゐるゝめ宿雪い去年の雪が春に消殘ゝうに舊巣い春もゝて後に入人ゝも荒ずると雲に屬来ゝん

菅三品

西樓月落花閑曲中殿燈殘竹裏音

内宴に曉の鶯ゝ宮殿近くゝづる心の題とうひゝれど大内と云う西樓い白虎樓中殿い清涼殿へ神璽宝劔と置御帳の四方燈あり掻灯とゝ

霞

霞光ハ曙て後火よりも於殷。草色ハ晴来て嫩して烟ニ似り
沙を鑚草ハ只三分計。樹ニ跨る霞ハ綫ニ半段餘

暁まで消残るを云月の西に落るまふ明旦の景氣ぞ花の間竹の裏ハ鶯のあそぶ處ぞ曲と音ふ囀と云一説に西樓ハ霽景樓と云と

拾遺 あらたまの年立かへるあしたより待るゝものハ鶯の声　素性

あら玉とハ磨かざる璞く夫を砥まてみがく也あらたまのとつける枕詞なり又ハあらたまるの畧しくいへり

あさみどり春立空に鶯の初音をまたぬ人ハあらじな　麗景殿女御

淺緑ハ空の色うす緑なり又松のみどりハ春ころものゆゑ春立空とつゞけん枕詞なり

うぐひすの声なかりせば雪消ぬ山里いかで春をしらまし　中務

拾遺集に中納言朝忠とあり深山幽谷雪の中にこもる鶯ハ春を忘まぞ初音を發此鳥なくバ冬の心まて在べき

霞

霞光曙後殷於火　草色晴来嫩似烟　白居易

曙の後霞ハあかくひかる火にたとへ春の空緑に晴来て若草のへ出るが烟の立升るごとし火の字に烟を以て對す

鑚沙草只三分計　跨樹霞纔半段餘　菅丞相

春あさく餘寒残題也　沙を鑚やぶり芽を吹若草只三分計にて延かぬる梢にかゝる霞ハいく段も鬖鬖がまだ寒ければ一段にも足らね

万葉 きのふこそ年ハ暮しか春霞かすがの山にはや立にけり　人丸

年の終ハ昨なりし今ハ春とてはや霞そめけるよといへるなり
のゝ濁るべきを清てよみ来る春日山ハ大和の名所なり

春霞たてるやいづこみよし野の吉野の山に雪ハふりつゝ　赤人

古今集にハよみ人しらず大和国三吉野郡にある山也みよしのよしの山とつゞけよめるぞ他所ハ霞もたち春めきぬると聞それいづこよ
やよし野山ハ余寒をげしく雪ふりて春のけしきハみえざるものと

朝日さす峯の白雪むら消て春の霞ハたなびきにけり　兼盛

雨

或ハ花の下ニ垂
〻て。潛ニ墨子之
悲を增。時ニ鬢の
間ニ舞て。暗ニ潘
郎之思を動す

長樂の鐘聲ハ花
外に盡龍池の柳
色ハ雨中ニ深

心ハ明らかなんぞ
釈ニおよぐず

雨

山ハ樹多ク枝葉まで土中の水氣を吸て含めると日ニ照レ蒸されて雲となれ月昇る其氣りと水ゆゑ雨とろうて降る

江以言

或垂花下潛增墨子之悲時舞鬢間

暗動潘郎之思

密雨散て糸のごとゝ題の詩序ニ墨子名ハ翟練る糸をもて悲めり染みハ黄ニ黒ニ染るなるべし人心の一圖ゐ〻ごとく糸のごと是を歎ニ今春雨の花ニ降垂が糸ニ似るまゝ悲を增人ニ潛ハ心のうちを云ごとく潘岳字ハ安仁晉の代虎賁中郎將ニ〻容顔美ニて類ゐ〻三十二の歳鬢ハ白髮が二筋生ルを安仁が作まる秋興の賦ニ書り文選ニ出此心を作て春雨が糸のごとく鬢の間ニ舞ゐるを是も鬢糸ゐを思ふ郎ハ夫のこと

長樂鐘聲花外盡龍池柳色雨中深

漢の高祖長樂宮を建内ニ鐘を架時ニよりて敲其声遠〻こゝを花樹の外までもゐう盡ニ謝承武陵郡の守とゐる黄龍有て其地の水中ハ〻ゐうゐを表を上りて賀をとゐう〻龍池と名づく其池辺の柳の色が春雨ニ一〻ほゐう深〻ゐうゐ龍池のこと武陵記ニ出

李嶠

養得て自花の父
母爲洗來て寧
藥の君臣と辨ん

花の新ニ開る日初
陽潤鳥の老て歸
時薄暮陰り

斜脚ハ暖風の先扇
處暗聲ハ朝日の
未晴㊟程

養得自爲花父母洗來寧辨藥君臣

春の雨ゐ〻〻潤ひ養て花と咲をゐ父母の子と育ゐ〻〻医書ニ君臣佐使の別あり其病を治する主藥を君藥と〻君藥ニ〻〻〻〻〻藥と佐使〻〻雨ハ花ニ藥ゐ〻ゐる頻ニ降来てハ藥の君も臣ゐ辨ゐ〻て普〻洗ひそ〻ぐ寧ハゐ〻ぞと云心此詩仙家の春雨の題を作〻

紀納言

花新開日初陽潤鳥老歸時薄暮陰

春色雨中ふつゐと云題也花が春雨ニ開き雨間ニさ〻出ゐ初陽潤て春色雨中ふつゐと云〻春深鳥の音も老て帰ゐ薄暮の雨ニ陰まゐ景色ゐ〻ゐう〻〻

菅三品

斜脚暖風先扇處暗聲朝日未晴程

斜ニ降雨の脚ハ暖ニ吹東風ニ扇まゐ〻ゐう暗〻ゐる夜の雨の声ハ朝日ゐ〻ゐ晴ゐ程ふゐて旭さ〻升ゐゐゐゐやゐて霽べきぞ

慶保胤

拾遺
搔ぐるゐぬるとも花の散げゐ源まゐ　後人和

野山をうけて櫻花をたづぬとさくら狩と云 降来雨に濡るるとても花にやどらうして来られらの花の陰にかくれんとのこころなり

新勅撰 もろ柳の枝ふるまよふ春雨の糸よりかぬる露もぞちる 伊勢

春雨の露柳の枝にかかりたるを以て玉とつらぬくと云 又ひとつを略すらつの字人の言口の内にあつて外へあらはれぬによつてとうすと云如し

梅 付紅梅

白片の落梅ハ澗水に浮ぶ 黄梢の新柳ハ城墻より出

梅花雪を帯て琴上に飛 柳色煙に和して酒中に入

梅 付紅梅

白片落梅浮澗水 黄梢新柳出城墻

梅の花片白きが澗水に散浮び新に芽を吹て柳の梢の黄なる城の築墻よりさし出る 山の水を夾むを澗と云ふと訓す 白居易

梅花帯雪飛琴上 柳色和煙入酒中

白梅の散来る雪を飛すとあるは晋の師曠と云楽官四月に白雪の曲を弾じけるに天大に曇て琴の上に降来ると云ことあり 青柳の下に酒を飲む 緑の色盃にうつりて煙は青きものなれば柳の色と煙とうつるを和すと混じ合せ陶淵明が閑居の門に柳五株あり其下に酒を弄びしとなるべし 章孝標

漸く薫る臘雪の新に封ずる裏 偸に綻ぶ春風の未扇（未）先

青絲纔に出陶門の柳 白玉装成庾嶺の梅

五嶺蒼々として雲往來す 但憐大庾萬株の梅

誰か言春色東從到と 露暖うして

漸薫臘雪新封裏 偸綻春風未扇先

臘ハ獵へ十二月獸を取て先祖を祭るゆゑ臘月と云 日ハ漢に戌の日魏に辰日晋に丑日を用 今ハ大寒に近き辰日を臘日とす 寒梅ハ臘月新に降る雪の封する裏より漸く薫じ春風いまだ扇来らざる先に偸綻て咲なるとぞ 寒梅早花と結と云題の御製なり 村上御製

青絲纔出陶門柳 白玉装成庾嶺梅

晋の陶淵明名ハ潜 門に五本の柳を植て自ら五柳先生と云 其柳が春風に靡て青き糸を纔出すごとし 大庾嶺ハ唐土五嶺の一にして白梅多し 其咲るハ白き玉をもて装ふ成るごとし 後江相公

五嶺蒼蒼雲往來 但憐大庾萬株梅

大庾 始安 臨賀 桂陽 揚陽の五ツ嶺蒼々とて山の端に雲往来さかんなる其中に大庾嶺なる万株あまく梅咲て但憐 菅三品

誰言春色從東到 露暖南枝花始開

南枝花始て開

煙柳色と添て看
猶浅鳥梅花と
踏て落て已に頻
なり

上に通て絶句一章に春東より到る誰か云ぞ南い火體にて暖なれば花も南の枝早く開ば南より来とも云べくんとも大庾の梅南枝先開坤元録にもあり

煙添柳色看猶浅鳥踏梅花落已頻

煙い柳の青きを云春ふかくなるまゝに柳の色まゝ添てうるはしぬと猶浅〳〵と作るは宮の花にもあり梅の散一〳〵は詠物なるべし

菅三品

○或説に堀河院の御時右衛門督師頼卿此詩を書加へらまくは無題の詩を信阿が説のと

百巣

いつ年稿にて梅〳〵家庭の梅の梅の記にあり　安倍度庭

往〳〵年い過〳〵年〳〵根越
てい根をかくてかく

万葉

我せこにうゑんと思ひ梅もとめ雪ふるもとに　赤人

夫をせこと云ふるは降ぬ我夫こもんと思ふも
雪ふりて梅の花にもしるもぬと女の心成てよるべ

拾遺

春とどまるべき梅の花まがへて雪ふる時は　紀恒

とめてい心に認てもおやはい無益に梅が香の霞とりく〳〵とよめる春の霞が梅の花をいく〳〵立隠る香と認て尋るべく誰人か折取ざらん霞の隠も詮也

紅梅

梅合雞舌兼紅氣江弄瓊花帯碧文

雞舌の丁子に其色赤く雞の舌に似れば雞舌香と云順が和名集に説あり梅い雞舌香と含の香あるにまゝに紅の氣と兼る

元稹

瓊い赤き玉に仙宮の樹と瓊樹と云江い岸の紅梅の色とうつて仙家のあゝ玉の花咲樹と弄ぶに似て水に碧の色の浪の文を帯る

浅紅嬋娟仙方之雪媿色濃香芬郁。

妓鑪之煙讓薫

仙人の藥方に絳雪玄霜あると云梅の浅紅の嬋娟に彼絳雪も及ざれば色を媿る濃香の芬郁に妓女の燒薫る香爐の烟も及ざる句と梅に讓

有色易分殘雪底無情難辨夕陽中

橋正通

紅梅

梅い雞舌と含で
紅氣と兼。江い瓊
花と弄て碧文と
帯〳〵

浅紅嬋娟に。仙方
之雪色と媿。濃香
芬郁に。妓鑪之煙
薫と讓

色有て分易〳〵殘
雪の底情無て辨

難夕陽の中

仙臼風生て空〳〵
雪と皺。野爐火
暖うして未煙を
揚㊟

柳

紅梅の色い消残る雪の底る分ち〳〵夕陽の
うげの中ゝ日の紅ゝ情る〳〵て辨へぐた〳〵

前中書王兼明

仙臼風生空皺雪野爐火暖未揚煙

紅梅の風ゝ散る仙家ゝ絳さ雪と擣て藥とする臼よう
箕ゝ取て皺ゝ似ゝう元よう實の雪る〳〵ねば空と云〳〵山の高こようゝて〳〵せ
ば野中ゝ咲ゝる紅梅が爐火の暖るで〳〵ゝ〳〵ゝるされども火ゝあらぎれば
いまだ煙と揚ずと作ゝう野と冶と音通ぜれば鍛冶の爐ゝ共

紀濟名

古今
春の〳〵で誰ゝる人ぞ梅ゝ見ぬ色ゝ見ぬ人ぞ知る人ぞ知る　友則

色ゝも香ゝもと云ゝうぞ紅梅ゝ知らぬ心ゝもち〳〵ぬ人ゝ物と
ゝゝもいせんす　此哥ゝ梅を折人ゝ送ゝてよめるゝ

新古今
色ゝも香ゝもとぞ思ひ見まし春の花ゝ見ぬ世ゝまでぞ

花山院

人の花とめづゝい色香と思ひ見ぬ心ゝ人の詠ゝ何の上ゝも無常世と觀
ずし花ゝうゝきる春深て一朝の風雨ゝ散ゝ此帝早〳〵位を退き佛門ゝ入ゝ

林鶯何處吟箏柱墻柳誰家曝麴塵

林ゝ鶯ゝ何の處ゝる箏の柱と吟ず。墻柳ゝ誰が家ゝる麴塵と曝

林ゝ啼鶯の音ゝ箏ゝ柱と〳〵〳〵彈ず吟ゝる事ゝふ聞ゆる鳥ゝ何ゝの處ゝ止り居ゝや　白

泰の蒙恬筆ゝ作ゝる又箏の曲ゝ春鶯囀の名ゝあり墻の柳
芽ゝを吹て麴塵の色ゝるが風ゝ靡ぎ黄ゝる糸ゝと曝ゝみゆゝ誰が
家ぞやゝ〳〵麴の塵ゝ黄ゝるものゝ麴塵ゝきゝと云ゝ〳〵前ゝも出

漸欲拂他騎馬客未多遮得上樓人

白氏ゝ樓の西ゝ新柳の條延出ゝると美ゝて作ゝるまぐ新ゝ出ゝる若枝
ゝゝ漸騎馬の客ゝ拂ゝ〳〵ゝて夫ゝう一位高〳〵樓ゝ上ゝる人ぞゝ未遮得ず　白

巫女廟花紅似粉昭君村柳翠於眉

昔楚の襄王陽臺ゝ行晝寐の夢ゝ神女ゝ交別ゝ臨んで
ゝゝれゝ巫山の陽ゝあり朝ゝ雲と成り暮ゝ雨と成ゝ〳〵と夢さめて　白
神女と祀ゝらまけり是を巫女廟と云此所ゝ花多〳〵それが神女の化
粧の紅粉ゝ似ゝるとゝ〳〵意漢の元帝の宮女ゝ王昭君と云美人あり
其住〳〵邑帰州の東北四十里ゝあり〳〵ゝ美女の住〳〵村の柳
ゝゝまゝ眉ゝ翠ゝ作ゝるぞ　次の句ゝ通ゝて一章ゝあり

誠に知老去て風情少見此争無一句詩
大庾嶺之梅い早落誰か粉粧と問ん
匡廬山の杏と未開
㊫豈紅艶と趣くや
雲紅鏡と擎扶桑の日春黄珠と嫋す嬾柳の風

誠知老去風情少見此争無一句詩

前の詩に通じて絶句一首〳〵誠に年老去ぬけば何ごとも興少〳〵若時ならせば此廟の花村の柳と見ていくばく一句の詩なり〳〵老ていたづら〳〵そのうち〳〵

江相公

大庾嶺之梅早落誰問粉粧匡廬山之杏未開豈趣紅艶

大庾嶺の梅い皆白花にて白粉と粧ときもすでに落て誰か粉粧と思問ん廬山の杏いまだ開ずあに今より其紅艶をば趣らざぬ〳〵ざされば梅と杏の間い柳の翠の色とこそ弄ぶ〳〵と柳と題す詩の序文なり〳〵云〳〵ぞ又周の成王の時匡裕と云人廬とも〳〵び〳〵山也〳〵匡廬山とつくこそ

雲擎紅鏡扶桑日春嫋黄珠嫋柳風

初日の出のさま雲が紅の鏡を擎さるに似たり扶桑い東方の海鳥なり唐より日本と扶桑と云〳〵文もあり東方をば〳〵云も東おさ〳〵

田達音

いづる旭と云意ぞ嫩柳に芽をふくめる黄なる珠とこそ〳〵それを春の風が嫋す是早春の作なり扶桑の説い淮南子にあり

菰宅迎晴庭月暗陸池逐日水烟深

菰が宅晴を迎て庭月暗陸が池日を逐て水烟深

柳の繁き題して作まうす菰康字叔夜柳を植て愛せう志げりくるといふ〳〵て菰が宅晴〳〵を迎る庭の月影暗と依る齊書に陸慧曉が宅の傍に池あり池辺に柳有て〳〵〳〵池の水に柳の色と畑とこそ陸が池日にまして水煙ぐるくい柳のそ〳〵志げ増云

後中書王具平

潭心月泛交枝桂岸口風來混葉蘋

柳が垂て水を拂い題と依る〳〵潭の心に月の泛ぶる時月中に
ある桂と岸の柳の水に枝垂と枝を交す岸の口に風吹来るに水上の
蘋と垂柳と葉が混じてひとつに成

菅三品

青柳の糸うちかづく春ぞ乱れて花もさきそめにける

青柳かびくづろ花も咲交りけるに糸と云に
乱と綻と自然に縁語をつづけるなり

貫之

春ごとに花のたもとを折かへて人にぞ見せん柳ぬきかへ

春ごとに花のたもとを折かへて人にぞ見せん柳ぬきかへ

花付落花

花上苑に明らかにして。輕軒九陌之塵を馳。猿空山に叫ぐ。斜月千巖之路を瑩

池色い溶溶として藍水を染。花光い焔焔として火春を燒

右の哥一本に載されども多くは歌ずして釈もなきぬ

新千載

柳のまゆふこもりかくれてあそぶうぐひす　英浦

柳の芽と合いまぐ葉を出さぬとまゆこもりと云て蜑の繭に糸のこもりふ准(柳い春と賞まぐ春来て色まさるとよめり又くるい糸乃縁語

花付落花

漢の武帝宮内に苑をひらき上林苑と名づく其花盛明なりと花見の人公子公卿が軽さ軒をうるぶ九重の阡陌を往来し人蹟をげく塵を馳てうぎたと繁花を云て平に幽閑を云空山に猿叫ぶ比有明の月斜に千万そそぐる巖の路を照し瑩とあるうと閑を題せ賦なり

張讀

花明上苑輕軒馳九陌之塵猿叫空山斜月瑩千巖之路

池色溶溶藍染水花光焔焔火燒春

池水の色青〳〵藍に染るごとく花の紅が光るやさ火のごとく春を燒と云て景色花よりいやまさる意〳〵溶々い水盛なる貞焔々いうゆる貞

菅三品

遥見人家花便入不論貴賤與親疎

春家々の園村の花を尋る題を作る貴も賤も親も疎も　白

白

日に瑩風に瑩。高低千顆萬顆之玉。染枝を染浪を染表裏一入再入之紅

誰か謂水心無と。濃艶臨兮波色を變ず誰か謂花

遥見人家花便入不論貴賤與親疎

日瑩風高低千顆萬顆之玉染枝

染浪表裏一入再入之紅

天暦の御時花光水上に浮顆て文人の試行き〜

其日の詩序に花を玉に見る日に瑩き風にみぐくと云高く枝に咲く花低く〜水にうつる影さゆるさ多きを千顆万顆の玉と作る下の句い花を紅脂に見る枝を染水にうつる浪をそもしると云たりひい表又い裏一入そめて薄紅再入ひさせ濃くまるのいろく梢と浪をそもしる

誰謂水無心濃艶臨兮波變色誰謂

語不と。輕漾激
して 兮 影脣を
動す

之と水と謂へと欲
まゝ。則漢女粉を
施之鏡清瑩う。
之と花と謂へと欲
まゝ。亦蜀人文を
濯之錦粲爛う

織こゝ何の糸自
ぞ唯暮の雨裁と
い定まる樣無着の
風に任

花不語輕漾激兮影動脣　同上

前に同じ序へ水心すこゝ誰ぞ云へ心わまぐこそ花の色濃艶なる
ぶ水に臨みうつまゝ波の色を変人の顔色を変ずゝ似うゝ花語
ずこゝ誰ぞ云へ輕漾激あいすまゝ水にうつる花の
影脣を動へ人のうちびとうごしこゝの語ごゝ

欲謂之水則漢女施粉之鏡清瑩欲

謂之花亦蜀人濯文之錦粲爛　順

花の色水に浮を題する序へ花の影うつまる水をこゝてこれと水といへこ
ぞ水にうつるまゝ漢の宮女が面に紅粉白粉と施鏡の清く瑩さこそ
こゝと思へる水にうつる花とこゝてこれと花とのそへこすれば花とこゝ思まず蜀
の国の人が錦を濯文の粲爛なると思へこゝなり蜀の成都に江あり
浸へあへこゝ錦の色うこゝこゝなへこゝで蜀江の錦とこゝ名産へ
○彼国の織の天下に名高へ日本伊豆の丈嶋に出て編織に似うこ

織自何糸唯暮雨裁無定樣任春風

花飛で錦の如幾
濃粧そ。織者ハ春
の風未箱に疊㊫

始て識春風の機
上に巧なることを唯
色を織のこゝ非芬
芳をも織り

眼ハ貧蜀郡裁殘
せる錦。耳ハ倦り秦
城調盡す箏

花の錦ハ何なる糸にて織出もそと思へバ唯暮の雨を糸にて
織なると春雨糸の如く降そもそ又此錦と裁こゝ定まる樣なへ春の風任トヤ　菅三品

花飛如錦幾濃粧織者春風未疊箱

花の錦のいろ〳〵幾くこゝもいろ〳〵濃なる粧ひなるそ此錦を織成者ハ春の風にていまゝ疊あげて箱にもおさめず。次の句に通ト一章なり　源英明

始識春風機上巧非唯織色織芬芳

前に通して絶句一章へ今そ始て春風の機上に巧なることと
識こゝ美へ色を織出すのこゝ芬芳なりもそと織なせり

眼貧蜀郡裁殘錦耳倦秦城調盡箏

春の末花も少く鶯も希なる題にて作へ眼にみる一ツ二ツ　源相規
の殘花ハ蜀江の錦の裁殘にて貧耳にきく鶯の音ハ春鶯囀の箏
の曲も聞倦るそこゝ調盡して今ハ声も少くなり
秦城ハ秦の都と云箏ハ秦の蒙恬造そ云

古今
もゝのはなさそ樣なりせば春のこゝろはけなしと　業平

櫻の花い咲とすぐ散るまひ雨とそ風とそ〻花うんと思ふ人の心の
いろそうさるに〻けれい世さくと云りの絶てなくい春の人心さそ長閑るあん

古今
春の日の光さすらに咲ぬるかのちそ恋しき　紀貫之

さく〻花咲るとう〻来る人とあくも〻へ花ゝを尋も来き花なくい
間も来まゝの心とゆゑ散てなき後そこひ〻〻とゆゑ情けゝ〻

古今
ゝ〻ての〻ち人なかく〻人摘花ゆゑ折て家ゝ〻へ　素性

人ゝ語聞もるぐうゆるるけ〻花と手毎ゝ折
もて家ゝ〻の土産ゝせんとゝつゝゝあげまゝ裳かり

落花

落花語不空樹を辭し。流水心無して自池ゝ入
朝ゝ落花を踏で相伴て出暮ゝ飛鳥ゝ隨て一時ゝ歸

春花の面面酣暢之筵ゝ闌入し。晩鶯々聲聲講誦之座ゝ豫參す

落花狼籍ゝ風狂して後啼鳥龍鐘ゝ雨の打時閣を離ゝ鳳の翔い檻ゝ憑て舞。樓を下娃の袖い階ゝ顧て飜

李二といふ客ゝ郭外ゝ逍遙する詩ゝ朝ゝ相伴て落花を踏なぐゝ出日暮ゝ飛鳥もものゝ栖ふゝ一時ゝ白居易と李二と家ゝ帰る

落花不語空辭樹流水無心自入池

元氏の舊宅を過るとて心ゝ傷めて作る花へいとゝもせ〻空し〻
樹の枝を辞し去て散落流ゝ水心ゝ入池を尋てあち入言外ゝ閑寂あり

朝踏落花相伴出暮隨飛鳥一時歸

春花面面闌入酣暢之筵晩鶯聲聲豫參講誦之座

後江相公

太宰の帥宮の御前ゝ史記を讀序ゝ文士並居て宴をとりくり酒も酣ゝして心と暢る筵席ゝ花も心ありて面々闌入とゝ日も晩ぐさの鶯声々々啼て史記と講ひ誦座ゝ豫參　闌い妄ゝ宮披ゝ入ゝ

落花狼籍風狂後啼鳥龍鐘雨打時

後江相公

狂風の後散されるる花地ゝちて狼籍雨ゝ打る啼鳥八啼て龍鐘　行不進貞　又龍鐘切樅ゝそつゝゝと云を二字ゝのべゝとゝ

離閣鳳翔憑檻舞。下樓娃袖顧階飜

菅三品

散る花が風ゝひるがへりて枝の間ゝ飛と題して作る鳳凰の閣を飛離ゝ又立くり檻ゝ憑そひて舞めぐると鳳を花ゝさゝ閑を樹

躑躅

晩蘂尚開紅躑躅
秋房始て結白芙蓉

拾遺

檻ちる赤木瓜ぬれて雨の花
花の散と雪と見る雪ふる空に風さむきなりのるふ
さわぐでのぐるなるふる花の雪のまぎれ

拾遺

このもとの桜ちるまであかぬかな
紫宸殿の御前のさくらの花散をそなるとのゝ主殿寮なり
禁中殿庭掃除のことを司るもの主殿つかさの下部伴氏
なる御奴之一説に臣とも呼臣のもつこべとなり落花おゝ
ろさぬ掃んこと紙を〻て朝の掃除をもとのもとの名なり

躑躅

山石榴の名躑躅に妻ゝぎる白羊山榴を食
躑躅〻て炙すゝりて羊躑躅の三字をそてしん

晩蘂尚開紅躑躅秋房始結白芙蓉

紅の躑躅の晩蘂がおくれて尚開白芙蓉遠に始て秋の房を
結ぶ是い元十八う漢の住家を作まるえ下の句い秋の景物なり

夜遊の人い尋來て把んと欲す寒食の家に應に折得て驚

款冬

雌黄を點着して天に意有。款冬誤

夜遊人欲尋來把寒食家應折得驚

夜遊之人ゝ躑躅の紅と火と心得燭に把んと欲寒食の
家に折て火をゝと思ひ驚うん荊楚歳時記に冬至後百五日に疾
風甚雨あると寒食と云と此時三日の間世に火と禁て冷物と食す晉の
文公いまさ〻字さし時国の難を避て亡さう介子推と云臣五人の英雄公子
に従ひ忠節を尽ゝ後文公入て位に即て各恩賞とのゝ介子推のゝ
其夜ゝ〻しゝ怨て母とのゝ綿上山の奥にかくる文公是を出さんとて山
に火をゝるゝ林火の母子樹とゝ焼死す文公悔悲て火い賢人を失ん
ものゝとて国に禁ゝひ故夏今に残る此詩山石榴艶うて火に似る題

源順

古今

古今恋の哥ゝてゝ人ゝ思ひ出る時いこひさりのをかゝとゝ云
心ゝ〻ゝ山城太秦の北に常磐山あく時いに云けいくゝ岩根に云けさ

平貞文

款冬

本草に冬花咲とあり今春の末の山吹に云その漢名知
ず和名集に款冬を也未不木と子和歌連俳用之

點着雌黄天有意款冬誤綻暮春風

て綻暮春の風

書窓に巻有て相收拾す。詔紙に文無して未奉行せ未

書窓有巻相收拾詔紙無文未奉行

款冬の黄に咲くに書の誤ある処へ唯黄にて点を着るごとし　清慎公

深く経巻あつく収拾るごとし詔書黄紙を用るは色山吹の色にたとへ詔紙に似れども文字なければいまだ何の詔とはいふと奉行ずあり　保胤

新古今

かぞへつるこゝろみなしの花の色に紅葉の色　原見王

神南備川山城大和二所にあり　川とよむべし　川辺に来り蛙啼やまぶきさきて面白うして後の春思出てよるなくべし

拾遺

春の八重山吹いとへどみなれぬ弾らんこそ　兼盛

拾遺集に人もとがめぬ春の花ありひとくさいひとくさ

藤

帳望す慈恩三月盡紫藤花落て鳥關關

紫藤の露底殘花の色翠竹の煙中暮鳥の聲

紫茸は偏に朱衣の色を奪。應て是花の心憲臺を忘る應

藤

帳望慈恩三月盡紫藤花落鳥關關

三月三十日慈恩寺に元十八に酬の詩に此寺は唐の太子母后の為に建るに藤多し三月も盡るゆゑ春のくるまを帳望めば藤も散鳥啼て　白

ものわすれなるさゝゐ関々は鳥の鳴貞唐の太子は後高宗皇帝と云母后は穆太后なり　此詩に鳥と云を鶯と云解あれども限べし

紫藤露底殘花色翠竹煙中暮鳥聲

四月になると春の残まる題なり露の底に藤の散残るを紫の色とくゞめ翠の竹が煙のごとくこめる中に暮の鶯なく　源相規

紫茸偏奪朱衣色應是花心忘憲臺

弾正大弼の亭にて藤の花をゑがきて作る弾正はゞじゝすの字そ内外の非違を糺すことを司ごる唐官御史臺憲臺とも云て不法を正す　順

に相當まる論語に紫は間色正色五色の外なるまぎらはしく朱のそを奪ふを悪むといへり邪路の正道を乱すをにくむ心に是にたと

づいて藤の紫が五位以上の着すべき朱の袍のいろをうばふ是ハ花の心し憲臺弾正をハ非法を糺す官なるを忘まさるなりん官位令ニ弾正大弼りと正五位下にあたるはじめさうり主の朱袍のいろを庭前の藤がうばふと云て却てさげすみ藤の美しきを称る也 紫茸ハ藤の異名

拾遺 田子の浦そこさへにほふ藤なみをかざしてゆかんみぬ人のため 縄丸

拾遺集にハ夏の部に入人丸家の集にあり駿河に田子の浦あり是ハ越中の多枯の浦の哥と云底さへハ底までの藤の影水にうつるを底までもうつりへ程の花を我のこゝろも本意ならねばかざし持行て人にもみせんとなり又藤並を浪によせてよむとぞ

続古今 ときはなる松のなたてにあやなくもかゝれる藤の咲てちるらん 貫之

常盤に栽ところの松に咲てうつる藤のえうつかちるをよ無益も名をたてまつると藤のちるをおもひあはれかなしとなるへし

和漢朗詠集抄巻之一終

夏

更衣

壁に背る燈ハ宿を経燈を残し箱を開衣ハ年を隔る香を帯なり

生衣ハ家人を待て着と欲宿醸ハ

和漢朗詠集抄巻之二

夏

更衣

春の衣を夏の衣に更る也宮中の御帳生絹に胡粉にて繪をかきたる壁代をも徹し御畳もあらため御服ハ御直衣すゞしの綾の御ひとへ御張袴女房の袷のきぬ共更衣のひとへうすぎぬすゞし裳ハ上﨟ハ薄ものの小上﨟ハすゞしろ常乃ごし所々の御装束掃部寮あらため御服ハ内蔵寮よりたてまつる

十月朔日又更衣あり公事根源江家次第に委し雲上の行事之

背壁燈殘經宿焔　開箱衣帶隔年香　白

光を此方へ向きハ壁ハ燈の背なる宵より挑て暁かいたるは一宿経る焔を残し今朝ハ更衣とて箱を開ひて夏衣を取出せば去夏の年を隔る香がありある

生衣欲待家人着　宿醸當招邑老酬

當て邑老を招て
酣なる　當

首夏

甕頭の竹葉は春を經て熟し。階底の薔薇は夏に入て開

苔石面に生じて輕衣短く。荷池心より出て小蓋疎なり

菅公仁和の頃讃州任国に下居て作り給へる生絹の夏衣は家人の裁縫を待て着んと欲宿醸あるる酒は邑の長老人を招て飲せんと思ひ賞翫して醉に及ぶを酣と云燕の召伯一月に三度邑老とまじれる桃樹に會せを求て作り給ひ　菅

拾遺

春の花の色香にそむる衣をうらやましく憂ふるもなを花をまもるこころかな

首夏

首いとはめ

甕頭竹葉經春熟階底薔薇入夏開

甕は酒を貯へる器。宜城より竹葉酒を出す。冬製て春熟を堂へ升ふ　白

階あるは其底の薔薇夏に開と云。花は春より夏にいたるまで

苔生石面輕衣短荷出池心小蓋疎

苔は短きものゝ石の面に生ずるいすじゝの軽き衣を石に著せるごとく荷の葉は池の心より生出るゝ小さき蓋のごとくにして疎なる初夏のあり　物部安興

拾遺

垣の隣を隔るふるさと春とへばうつと云

又卯の花やづしく春の花を忘る心あり

順

夏夜

風枯木を吹て晴天の月照て平砂に夏夜の霜

風竹に生夜窓の閒に卧月松を照て時臺の上に行

空夜窓閒なる螢度て後深更軒白

拾遺

夏の夜のかきねや春を偏つゝ夏を基にけるとあるかのもの　順

夏夜

風吹枯木晴天雨月照平砂夏夜霜

江の辺の樓より夕景色をかぐめて作る。枯るる木に風の吹き晴るる天に雨ふると聞へ月が平地の砂土を照す時は夏の夜も霜を置くかと思ふ上の句は冬の風の躰なれども下の句は此に入　白

風生竹夜窓閒卧月照松時臺上行

軒に近き竹の林に風をぐまれる夜窓を明て卧ふるに松の木の間より月の照来る時をきくふるに出臺の上に起行　白

題早夏の獨居とあり

空夜窓閒螢度後深更軒白月明初

月の明る初

空夜の月出ざる宵闇の窓の前に蛍飛てとゝ閑に寂も　紀納言
〳〵深更月初てさ〳〵出軒端も白〳〵る夜を五つに分初更ゟ五
更に至その更ゟけると深更
と云夜陰房に帰ゟの作ゟ

夏の夜を短みとしぬる人いかゝ思ひざるらん　人丸
恋哥ゟ〳〵ゟ〳〵寝もやらぬに明ると云ふ思ひのなぐさめ
身ゟに短夜も明〳〵ぬるゝ絡ぬ不の明ぬ畢の如く絡不に明け畢へ　同

家集
ゟ〳〵ぎしぬ皐月の短夜もゟしぬまぢ明ゟつも

拾遺集ゟに人ゟ〳〵独寝まぢ明〳〵ゟつへ〳〵の字もの字ハ助字へ
ゟついゟめゟとゟぢ〳〵皐月ハ五月の異名ゟ〳〵月の畧訓へ

古今
ゟの夜ぬるゝとすれば郭公なく一声ふるゝゟの名　貫之

ゟめ〳〵めい晨なり
哥の意釈に及ず

端午

端いもぢめ〳〵と今吾を用て午を〳〵ぢ楚人屈平五月五日

時有戸に當て身を危うして立り。意無して故園足に任て行

有時當戸危身立無意故園任足行

納涼

初の午日汨羅に陷て死す楚人此日蒋の葉に飯を納五色の糸すて巻水に投〳〵祭ると云又此夜藥露降と云

荆楚歳時記楚国の俗端午に艾を以人の形を作り門戸にかけて菅毒氣をさらへと艾人を掛と云是を題せ〳〵五月五日の時に有て艾人が危〳〵戸に當て立ると草を束人ゟれい心もあるふ風に立ゟまゝして已が摘取き園までも轉び行ゟ足に任さてと云人の故郷とゟ〳〵故の園と云

家集
ゟ〳〵ぢまとゟ〳〵ぢあひ〳〵ぢ

昔内裏にて端午の競馬あり其若駒を追ゟ若蒋を用ゆ
又菖蒲草も此時用ゐ生後ゟ馬のおひをくまて肩ゟ〳〵ぢ

拾遺
ゟのゟまでよそふひもゟ我宮のけまとゟ〳〵ぢ　能宣

昨まで池ゟ〳〵ありて余呼ゟを今軒に背ゟ〳〵ぢ思ひ人を吾妻とお
してゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ぢ又物の端をつまとゟ〳〵ぢ宿のゟ〳〵ぢ軒端の意も命へ

納涼

納いゟ〳〵なり二字
そすゟ〳〵と訓ず

青苔地上殘雨を消し。綠樹陰前晩涼を逐

露簟清瑩として夜を迎て滑ふ風襟蕭灑として秋ふ先て涼

是禪房に熱の到ると無しあゝ不。但能心靜るまゝ即身も涼

班婕妤が團雪之扇。岸風に代て空長忘燕

昭王の招涼之珠。沙月に當て空自得

青苔地上消殘雨綠樹陰前逐晩涼

雨の降くる跡の青き苔の上露のぢゝ濡て雨も晴んとするその殘雨の雫をよゝひ消とゝ青葉綠に茂る樹陰或ゝ前と然るべき處と逐て涼

白

露簟清瑩迎夜滑風襟蕭灑先秋涼

簟にうゝむゝろゝ青竹にて筵のごゝ編まゝたものとすゝゝゝ涼臺と云

白

ゝゝひそれに夜露を置て清く瑩夜に入ゝゝゝひ滑るぐゝるゝる風襟に衣の襟に風とゝゝむ蕭灑いとゝゝゝ身にもゝ夏なれど夜に秋に先ざて涼さぞ地上の夜境と云題なれば作るべし

不是禪房無熱到但能心靜即身涼

白居易暑に堪へ桓叔禪師の房にて作る禪に浮屠の号房に舍

白

へ炎暑の熱さゞ禪房に到らざるにあゝ後ど心靜なれば自然と涼なる悟の心

班婕妤團雪之扇代岸風兮長忘燕

昭王招涼之珠當沙月兮自得

大江匡衡

炎暑を避て水石に對し題の詩序に漢の孝成帝の後宮の美人班氏婕妤女の官と云が白き紈絹にて扇を製り團雪の扇と云夏手にとるさゝび携へ冷さを招涼珠と名づゝ今沙石を照す明月を弄べかの珠を得る心地へ

の扇も水岸の涼しき風に打捨る燕の昭王黑蜂の珠あて是を置び夏も

卧見新圖臨水障行吟古集納涼詩

涼の躰を画くる屏風を賦しのゝ新に圖くる水辺に臨める画の屏

菅

障を卧て見又堂に行堂に行ゝて古人の詩集にある画にを口号其納涼の詩ゝゝも画のおもむきに合ひ画もいさゝ詩意にゝるひと起行に吟ずるゝ詩に有声の画々に無声の詩といふもべなゝ

池冷水無三伏夏松高風有一聲秋

京六条京極に融の大臣の家あり河原院是なり此院の長秀

源英明

上人の坊にて作る冷じゝひゝゝゝ夏至の後第三の庚の日を初伏四の庚を中伏立秋の後初庚を末伏とゝすゝゝ三伏と云夏火氣盛にて秋の金氣に克まゝ伏する義なり池水すゝまゝすゝゝきゝゝ夏もなく松に吹風涼ゝゝ秋の心地とゝ菅三品文時卿評して風高松有一聲秋とゝゝ作べきと宜とぞ

晩夏

竹亭陰合偏宜夏水檻風涼不待秋

夏ハ竹ノ陰ヲ合テ涼シキ事ヲ宜シトス水檻ハ水ノ上ニ臨ム高欄ナレバ風涼シク秋ヲ待ツ

古今六帖

すゞしさを誰かはつたへ初しもの　夏ゆき

常夏ハ瞿麥ノ異名ノ冷シキヲ床ニヨセテ居ル床ノアツキヲ思ヒ知ルコロヲ暑ゾマサルトヨロコブ

新千載

手ニすくふ人ハ秋ヲ待ツ泉ノ水　中務

感シ此下潛水ニヨセテモ秋ノヨウヒ来ルコトヨアルカナ

拾遺

わらげよ岩井の水を結びあげて夏の涼と手ニ掬ブ　恵慶

石ヲ井筒ニ云ヒ岩井ト云ヒ結ビ上ル掬ビ汲ム河原ノ院ノ井ノコトニテ涼シキヨシヨミタルカナ

晩夏　晩いくさ

竹亭陰合偏宜夏水檻風涼不待秋

永安ト云処ノ水辺ニアル亭ニテ作ルカタヘニ竹林アリ陰ヲ合テ透間ナク茂ルユヘ夏日ヲヨケ宜シ水ニ臨高欄ナレバ風涼シク秋ヲ待ツモ及ヌ檻ヲ訓ジテ欄干トイフナリ

夏ハ扇ト秋ノ風ト人ニ知ラレテ　中務

新古今集ニハ壬生忠岑トアリ夏果ル扇モ手ニ取ヒ冷キ玉露モ手ニ結ブ扇トツヒヤスヒ先ヘ知ル人ナシトアリ

祓ヘトモキヨメ難シ神ニ祈ル　齋宮

拾遺集ニハ藤原長能トアリ　神ニ祈ル祓宜説讃ヲモキヨメ難シ荒神モ知ル夏越ノ夜ニテ和ルヲ拾遺ニ蠅声荒ル神モ知ル夜トアリ

花橘

盧橘子低山雨重　枾欄葉戰水風涼

西湖ヨリ帰ルニテ孤山寺ヲ望テ詠ル景色ヲ作ル　盧橘　白

の子ガ多クトキヲウ枝撓低ル山近ク降ル雨ニイヨイヨ重リヲカル湖水ヨリ吹来ル風涼シク枾欄ノ葉ガソヨグ

花橘

盧橘子低山雨重　枾欄葉戰水風涼

枝ゝハ金鈴と繫春雨の後。花を紫麝を薫ず凱風の程

蓮

枝繫金鈴春雨後花薫紫麝凱風程

春雨ニ養まてのち熟ーする花橘が黄ぐゝ枝ニ金の鈴を繫る正凱風ニ橘の花の薫ちい麝香のごし紫麝ーやうゝ其獣のいろ

後中書王

むゝさいなる由あニ云云凱風い爾雅毛詩等ニ南風とありてニい夏の火体の風をいふなり

さつきまち花橘のかをとめてむかしの人の袖の香ぞする　伊勢

古今よミ人しらずとあり此哥業平宇佐の勅使ニ下りしとむと云伊勢物語の哥と伊勢ものがたりと取ちがへると云又橘い垂仁天皇の御時田道間守を異邦ニつかひ非時の果と求めのゝニ間守が袖ニいれ来りしゆゑむゝしの人の袖の香ともむといふ又いつの年も五月まちて花咲その香と知さる人のそでのうニ喩ふ

ほすもとにかをるたちばなかをとめてなくいもがあやめぐさ　丹後

新古今ニ人しらずとあり郭公花さちばなの香を心ニ認てこゑのいもがもとめ人のこひしさ

蓮

花を蓮と云葉を荷と云根を藕といふなり

風荷の老葉い蕭條ーして綠ーなり。水藻の殘花い寂寞ーとして紅なり

葉展て影翻砌ニ當月。花開て香散ず簾ニ入風

煙翠扇を開清風の曉。水紅衣を泛白露の秋

何ニ緣て更ニ貧ん吳山の曲便是

風荷老葉蕭條綠水藻殘花寂寞紅

荷葉の老るニ風あるうて蕭條綠ーー水辺ニ生る藻の花ぞ散残て寂寞紅のいろあり秋の詩ふぐる上の句蓮の縁あつて此部ニ入う

白

葉展影翻當砌月花開香散入簾風

荷の巻葉が展て開ーるニ月さして葉の動ニ従て月の影も翻る此詩階下の蓮を題をゆゑ砌と云階の下ぐ花ひゝけば其香ぐ風ニうつり階上の御簾の中まで入ゝ

白

煙開翠扇清風曉水泛紅衣白露秋

曉まぐれ水畑のうつ中ニ翠の扇とひらけ清き風を生ずと荷のそぐとあをき扇ニうるせり紅蓮花の咲るゝ水ニうつり紅き衣をうつべるゝ露白きい秋の景物蓮い夏の末より秋ニいる花ニて夏の季とまるものゝ清風の字も時の景物なり

許渾

緣何更貧吳山曲便是吾君座下花

吾君座下の花
あまびなり

岸竹枝低るゝハ應に鳥の宿するなる應。潭荷葉動ハ是魚の遊なるらん

經にハ題目爲佛眼爲。知ぬ汝が花中に善根を植ることを

郭公

一聲の山鳥ハ曙雲の外。萬點の水螢ハ秋草の中

延喜御製

亭子院の寛平法皇五十の御賀行せらるゝ御子延喜の帝行幸あり御屏風に呉山千葉の蓮華を画しと叡覧有ての御製之佛氏の説に天竺の流水大臣罪を犯し刑せらるべきを呉山曲に池ありて青蓮花あり是を尋来らバ罪を免さんとの王命をよむりてかしこに至る青蓮花赤栴檀あまた大龍まもりて近付がたきに呉山の羅漢を請じ問るれバ南無佛と唱へよ龍神も佛子と思ひ害せじと教のごとして花をとりえて王に献じ免されたり法花傳にくへたり此意を作らせられて何ぞわれに呉山の曲をとらむと覓き此画ハそぞろに其蓮あれ吾法皇の御座のわきの花なるを遠くもとめんや

岸竹枝低應鳥宿潭荷葉動是魚遊

紀在昌

池辺の亭にて晩の景色を作る之岸の竹の枝低るゝハ鳥が時を卜するとみえ潭水に浮る荷の葉の動くハ魚の遊にてあらん

經爲題目佛爲眼。知汝花中植善根

源爲憲

妙法蓮華經にハ蓮を題目とし題目ハ名とするにてえ又諸経に眼を青蓮に喩てあり汝ハ諸の花のうちにも善根を植るそのと知る

佛眼の釈なれバ末の佛支の詩によくじ又法華経一部八巻ハ後秦の鳩摩羅什三藏の飜譯する処なり

古今 はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かハ露を玉とあざむく 僧正遍昭

心ありてハ持てと欺ハ詐るなり濁に染ぬ清浄の心と持ながら露を玉とこそせめるぞ 又ありてハありさへつの字を略すと 柳の哥に釈す

郭公

郭国の公の魂鳥となりし故の名又ハ蜀の望帝の魄なりとて蜀魄とも云漢に子規其外称呼多し和名保止々木寸〇禽類によじれ人あり云くらくこうつとうわきぎす。一名捉てらるに皆似て異なと然ども同種の物なれバ郭公を別べからず

一聲山鳥曙雲外。萬點水螢秋草中

許渾

曙の雲の外に山鳥なづきに一聲啼万点の螢秋のくさむらにとび又腐草螢と化すハ水辺のてるまだ水螢と云多きと少きと句を成す面白

さつき闇おぼつかなきに時鳥なくなる声のいとぞ遥けき 明日香皇子

新後拾遺ハ赤人とありおぼつかなきと五月闇のくらきそらをさしていへるなりさやけきハ遥なりといふと

螢

螢火亂飛で秋已に近。辰星早没して夜初て長

拾遺 ゆきやらで山路くらしつ郭公今一声のきかまほしさに 公忠

一声のやくぎん今一声きたきまゝに行もやらずして日を暮したる也 此哥北の宮裳着の屏風の繪をよめる也 女の裳着ハ男の元服に同し

拾遺 さよふけて寝ざめざりせば郭公人づてにこそきくべかりけれ 忠見

寝覚にその声をきゝうましことならずバ ねざめずバよその人づてにのミ可聞ものを也

螢

月令に季夏の月腐草化して螢となる

螢火亂飛秋已近。辰星早没夜初長 元稹

螢火みだれ飛で秋ちかきをしらしめ 宵にみえたる水星たちまち西に沈て没まして夜長の比になるとなり 辰星ハ北辰にあらず水星也 五星の一ツにて常に日輪に前後して轉ず ゆゑ日におくれ西にみえ日に前て晨に東にみえ 日に合ときハ伏してみえず 春分のころ奎角のあたりにみえ夏至に井宿秋分に角亢につき冬至に牽牛につきてみゆる太白星に比すればちかくてひくく小さし

蒹葭水暗して螢夜を知。楊柳風高して雁秋を送

明明として仍在。誰か月光を屋上に於追ん。皓皓として消。不豈雪片を床頭に於積んや

山經の巻の裏に岫を過ると疑海賦の篇の中に流に宿するに似たり

蒹葭水暗螢知夜。楊柳風高雁送秋 許渾

水辺の蒹葭のしげく幽暗なるには螢の光があらはれて夜に知し 雁が南に来るハ胡塞の楊柳の風に秋の氣を送るごとし 胡地ハ柳多し

明明仍在。誰追月光於屋上。皓皓不消。豈積雪片於床頭 紀納言

螢の光りて書を讀ところを題せる賦也 晋の車胤字ハ武宗河東の人なり家貧して油なければ螢をあつめ嚢に入り其光にて夜学をせし 吏部尚書に日本式部丞にあたると云官にのぼる 又江士清月夜に屋の上に書を讀月の頭にそむき光を追て終夜文をよみし 又孫康家貧しければ雪を積で夜文をよみたる 螢の光が明々としてあるまでも仍在きれバ月の光を追に及べず 皓々に消ずあきらかなれバ雪を一片づゝ持来て床の頭に積るも及ぬと也

山經巻裏疑過岫。海賦篇中似宿流 橘直幹

夏の禹王九州の水を治め鳥獣異魚の奇怪なることをしるし 以後深山幽谷に通ふ人見て驚んことを思て海山のことをしるし山海経

と云書を作り其山の部を山経と云へり螢火うて是をよるび螢が山の岫を飛過ると疑る岫い山に穴ある処又太玄虚海賦を作ると文選に出たれを螢うてよるび流水に螢が宿ると有り

蛍火の夜のとりびの風さえさえ螢かな　兼人

新勅撰によみ人しらず風うちそえぬれとあり叢のわらる火を荒る屋のもも〳〵火ともるが風にうちそえぬれとさえの螢うてあり〳〵と知る

後撰集

ちはやぶるかまのいろはのあまりとてしなりけり

宇多天皇の皇女柔子内親王を桂の皇女と奉るが螢とうてとあり上に童女汗衫の袖にとりつくてようとる又大和物語に桂の皇女の御許へ敦慶親王かよひ〳〵を宮の童女こひてようみ人をまろうとあり是もまろが恋哥に

蟬

土中の虫夏に至化して蟬となりつもとのそあり

遅遅兮春日。玉甃暖兮温泉溢。嫋嫋兮秋風。山蟬鳴兮宮樹紅

白

遅遅る兮春の日。玉甃暖るもの〳〵兮温泉溢。嫋嫋る兮秋の風。山蟬鳴て兮宮樹紅なり

千峯の鳥路梅雨を含。五月の蟬聲変秋を送

驪山宮の賦あり秦の始皇宮を建〳〵より世々の天子行幸して暑を避るの上に唐の憲宗帝い六宮百官従ひゆきて路すがら費あるさと思ひ行幸〳〵ありをと美て作る白氏文集楽府の中に出る驪山高の詞にも遅々い春の日永きを玉の甃い宮を褒るそ始皇此山に神女とあそび〳〵背ることあるを怒て神女つぐ死とさ〳〵るが身に瘡とある帝恐れ謝〳〵のひるれば神女心とけて温泉を出〳〵あらつ〳〵め愈々る故度て温泉と云嫋々なる風の景色秋を告ることろ〳〵も山蟬かつて宮をあり〳〵樹々のこずゑもいろづくてこのわざるなり

李嘉祐

千峯鳥路含梅雨五月蟬聲送変秋

千万つ〳〵る峯とうあぐ行ば雲とさあり梅雨をりとうこと鳥路い雲路と云ひ梅熟するころの雨と梅雨と云又梅い黴に五月雨の湿黴を生すると云又月令に四月を変秋とすい百穀その生ずと春〳〵熟すると秋〳〵に変い四月熟〳〵五月刈ゆ三四月を秋と千に五月の空に鳴せらの声いもゆ〳〵変の秋をあること〳〵人をおく〳〵ひ〳〵るなり

烏緑蕪ニ下て秦苑静なり。蟬黄葉み鳴て漢宮秋なり

今年例よりも異ニして腸先斷。是蟬の悲のみにあら不客の意悲ニ

歳去歳来て聽ども變ぜ不。言ニ莫秋後遂ニ空と爲と

烏下緑蕪秦苑靜蟬鳴黄葉漢宮秋

三体詩ニも出て感陽宮の荒ニしまを作ニ始皇の開ニ許渾

苑も今はあれにて名もなき草ぞ心まゝニ緑ニ成ぬる人もなく静なるまゝ

烏が下てあそぶ蕪い悪艸ニ秋の梢黄なる色つき蟬の声もかすかに

漢宮のさんなり〳〵も秋の寂〳〵と云て衰弊のさまを述ニ

今年異例腸先斷不是蟬悲客意悲

菅公讃岐守ニて任国ニその御作ニ今年い例年より蟬の声ぞ悲く菅

腸が断ニゆゑ蟬の声いかゝなるあはれ吾旅客と成て意悲ニもまさかく聞ニ

歳去歳來聽不變莫言秋後遂爲空

歳いあらたまれども蟬の声い年々同ニされば秋の後ニあけの紀納言

うせぬるなれいべ〳〵ぶ空いなるまゝにてらといふぞ〳〵

夏山の蟬の指の言葉いなるぞ悔の声いなる　人丸

こゝろいあるまゝ

なるべ〳〵

扇

盛夏も消不雪。終年も盡ニ無風。秋を引て手裏ニ生ず。月を藏て懐中ニ入

後撰

見とりよ〳〵もとめぬ袖をとて後をかく出れば海を　大納言光

後撰集ニのいひける女ニ蟬の脱をつゝみて送りとる人もすきめぬとひり人もとうあ〳〵ぬるころ〳〵とぶめぬとゝべ誰惜ることゝ心の恨ニ

恋するとてかく蟬の空とるゝ〳〵を

ゝゝと声すると云を恋ニよそへよる

扇

女媧氏扇を造る日本ニて平敦盛を始とす

とりつの後世の支ニてその前ナでニ扇あり

盛夏不消雪終年無盡風引秋生手裏藏月入懐中

白

扇と賦すゝさんニ暑き夏も雪あるぞ〳〵つゝの風いやむことあるとも年の

終まで吹やまぬ風ニ手ニ〳〵上まゞ秋の冷〳〵さ手のうちり

あり〳〵ことあるさもゝぶ明月のいろとゝ〳〵も忽ふゝろ〳〵藏る〳〵○班婕

妤扇を製る詩ニ新裂齊紈素皎潔如霜雪裁為合歡扇團々似明月

とゝ〳〵扇と雪月ニ〳〵〳〵〳〵班女のこと

上ニ納涼の詩下ニ雪の詩の釈りあり

期せ不夜漏初て分て後。唯翫秋風未到前

「不」期夜漏初分後。唯翫秋風未」到前

菅三品

軽扇明月を動すと云題にて白扇のうごくを月によそへてつくるなり
期せずとハ待合さずと云心 夜漏とハ銅の器に水を盛下にあなをあけ水のも
らし両の壺をうけ右を昼とし左を夜とすれハ漏剋是之初て分ハ左の壺にうつれ
夜となる初ハ月ハ夜を期して出れども是ハ扇の月ゆへ昼出て夜を期合
さぬ月ハ秋を賞すれども是ハ
秋風をまたぬ夏のほどよりてあそぶ

拾遺
天の川河瀬すゞしき七夕に扇の風をなほやかさまし　中務

羅の扇に織
つける哥なり

拾遺
天の川扇の風に霧はれて空すみわたる鵲のはし　元輔

ことはりに詞橋のえんあり　鵲のはし七夕二星の
契るも秋の巻七夕の所にくはしく釈すれバこゝに畧す

家集
君が手にまかする扇の風なれバおのづからなる草もなびかむ　中務

北の宮の内に献りし御扇にと詞書あり王の御手にふれしもの扇
なれバ此風にハ天下の万民艸木までもうれしなびくべしと祝へるなり

和漢朗詠集抄巻之二終